

明治大学の中の地域文化

— 岸本辰雄・宮城浩蔵・矢代操と子母澤寛たち —

Local Culture in Meiji University :

Tatsuo Kishimoto, Kozo Miyagi and Misao Yashiro,
Together with Kan Shimozawa and Others

吉田悦志

YOSHIDA, Etsushi

はじめに

かつて私は『明治大学小史』⁽¹⁾のコラム欄に「明治大学と日本海文化の関係を説く人⁽²⁾がいる。改めて私もその関係性の指摘に賛同する。むしろ、さらにラディカルに、日本海文化が都市東京の明治法律学校に注入され、堆積し伝統と化して、いま、明治大学があるとすら考える」と書いた。この考えは変わらずある。むしろささやかな確信になりつつある。その経緯を論としてここに提示しておきたいと思に至った。

1 創立者たちと出身藩

1881（明治14）年1月に明治法律学校は有楽町に設置された。設置者は鳥取藩出身の岸本辰雄、鯖江藩出身の矢代操、天童藩出身の宮城浩蔵、県単位なら鳥取県、福井県、山形県出身者たちである。いずれも日本海に面した立地条件を有する県である。

天童藩が山形県中央部東寄りに位置していることから、また気候が内陸性の特徴があることから、日本海地域文化圏内に単純明快に含めることは多少の無理があろう。ただ、江戸期から明治期における北陸、山陰、越前の厳しい気候や生活の状況は共通する。藤沢周平の『たそがれ清兵衛』⁽³⁾『蝉しぐれ』⁽⁴⁾などに描かれている「海坂藩」は実在した「庄内藩」をモデルとしており、そこに暮らす下級武士たちの生活と気候風土の厳しい現実、天童藩、鳥取藩、鯖江藩に通

(1) 明治大学史資料センター編著『明治大学小史 —〈個〉を強くする大学130年』2010（平成22）年3月学文社発刊

(2) 渡辺隆喜「日本海地域の風土と人間 — 創立者の思想とかかわって」（明治大学大学史資料委員会編「一二〇年の学譜 大学史紀要第六号」）所収、2001（平成13）年11月学校法人明治大学発刊。

(3) 藤沢周平『たそがれ清兵衛』1991（平成3）年9月新潮社（新潮文庫）発刊。映画は2002（平成14）年公開。

(4) 藤沢周平『蝉しぐれ』1991（平成3）年5月文藝春秋（文春文庫）発刊。映画は2005（平成17）年公開。

底する大きな特色である。それ故全体の構想の中に宮城浩蔵を含めて考えてゆく。

明治法律学校設置者であり初代校長の岸本辰雄は日本海地域文化を体現した人物の典型であるし、設置者の一人・矢代操も地域圏内に生育した。岸本は幼名辰三郎、1851（嘉永4）年11月、23俵4人扶持、御作事方下吟味役岸本平次郎の次男として、現鳥取市南本町に生まれている⁽⁵⁾。最下級武士の家柄である。矢代操は、幼名松本美太（みた、よした、よしふと、読み方は特定されていない⁽⁶⁾、嘉永6年6月、7両3人扶持の中小姓格の松本伝吾の3男として、現福井県鯖江市に生まれている。家柄は士族328人中210番目のランクであったという⁽⁷⁾。松本美太は1869（明治2）年10月、5石3人扶持の矢代家に入籍相続して矢代姓となる。松本家とほぼ同格の家柄で、やはり下級武士に属す。宮城浩蔵は、嘉永5年4月、15人扶持徒士目付兼藩医武田玄々（直道）の次男として、現山形県天童市に生まれる。岸本や矢代に比べればやや格上だが、天童藩が如何せん小藩の上、幕末期は特に財政は窮乏していた。3人は嘉永4、5、6年生まれの時代であり、嘉永6年黒船来襲後の怒濤の時代を生き抜いた世代であった。

2 共学社から貢進生へ

1869（明治2）年5月に箕作麟祥は神田南神保町の自宅に私塾「共学社」を開いて洋学を講じた。岸本辰雄（19歳）、兆民中江篤介、馬城大井憲太郎や、遅れて宮城浩蔵（18歳）らが学んだ。ここに集った人脈と学んだ教養や思想が後に、共学社、貢進生、大学南校、司法省明法寮、フランス留学、帰国後大井憲太郎らとの講法学会等での教育経験を経て、明治法律学校設立へと繋がって行くのである。

箕作麟祥は明治法律学校設立時に名誉校員に推されている。渡辺隆喜⁽⁸⁾は、箕作については「岸本、宮城にとっては明治三年以来教えをうけた先生である。明治法律学校の名誉校員に選ばれるのも、単に共学社時代の教師としてではなく、司法省法学校時代を通じて創立者たちの法学上の師であったからであろう」と示唆している。共学社から明治法律学校設立までの3人の学びの系譜を眺めれば、渡辺の示唆は諾える。

さて、『明治大学百年史第3巻通史I』によれば、維新政府は大学教育の充実を図るため、明治2年昌平校を大学とし、開成所、医学校を分局とする。さらに同年12月には開成所を大学南校、医学校を大学東校と改称した。南校を政治経済法学の教育機関と位置づけたのである。こうした近代日本教育制度確立へむかう歩みの中で、3人の創立者にとってその出会いを決定する制度が1870（明治3）年2月の大学規則に設けられた「貢法」である。藩という狭い地域性から抜け出て、

(5) 鳥取県立博物館所蔵「安政五年鳥取城下絵図」により、明治大学大学史資料センターの阿部裕樹が、岸本辰雄の生家を特定した。なお、この「絵図」は父・岸本平次郎が制作に係った。

(6) 『明治大学創始者 矢代操』2003（平成15）年11月矢代操先生胸像建設実行委員会発刊。

(7) 明治大学百年史編纂委員会編『明治大学百年史第3巻通史I』1992（平成4）年10月学校法人明治大学発刊。

(8) (7)に同じ。

日本国家のために尽くす有為の人材を「貢進生」として各地域から大学へ「貢進」させる制度である。維新政府は大学だけではなく、近代的法曹家育成のため司法省に明法寮という養成機関を設置した。1871（明治4）年のことで、翌5年8月には初めての明法寮生徒が20名選ばれており、その中に鳥取藩から岸本辰雄、天童藩から宮城浩蔵が「貢進生」として入学していたのである。岸本と宮城は、箕作麟祥の共学社から明法寮にスライド入学したことになる。鯖江の矢代操だけは時期が遅れている。矢代は貢進生として大学南校に入り、明法寮には1874（明治7）年4月に2人に遅れて入っている。ここで明法寮に岸本辰雄、宮城浩蔵、矢代操という3人の明治法律学校創設者が集結し、学問の研鑽を積みながら、友情を培っていくことになったのである。

3 司法省明法寮の5人組

渡辺隆喜によれば⁽⁹⁾、明法寮の5人組と言われたグループが形成されたのがこの時期である。3人の創立者に加えて、富山藩下級士族出身の磯部四郎と、金沢藩下級士族出身の杉村虎一が、鯖江藩の江戸詰め藩士中村某の家を「たまり場」のようにしていたと言う。磯部四郎も杉村虎一もともに明治法律学校設立に深く関わった法学者であった。渡辺隆喜は「矢代操——人と学問——」と題した講演の中で、「明法寮の五人組と称される、日本海諸藩出身者の仲間が形成されるわけです」と話している。創設に関わった重要な人物である西園寺公望を除いて、日本海地域諸藩出身者5名を明治大学の存立基盤を形成した人たちと位置づけながら言及したもっとも早い発言と考えられる。

磯部四郎⁽¹⁰⁾は、「明治法律学校規則」⁽¹¹⁾（明治18年）によれば、民法草案という科目を担当しており、1910（明治43）年に起った刑法第73条事案いわゆる大逆事件の被告の弁護人として知られており、管見では森鷗外の個人的な法律問題に携わってもいた。大逆事件の弁護人については後に「平出修」の項であらためて触れたい。

杉村虎一については、3兄弟を論じた渡辺隆喜の的確な分析発言がある。「矢代操——人と学問——」講演の中で、長兄の杉村寛正はエリート官僚であり、民権結社を組織し地方自治を主張した人物、次兄の杉村虎一は明治法律学校設立に係り、法典編纂事業から外交官に転じた人物、末弟の杉村文一は島田一郎らと大久保利通を暗殺⁽¹²⁾し18歳で処刑された人物と紹介して、まために「兄が役人として北陸の自立化を願って地方自治を主張します。次兄の虎一が、法制官僚として、あるいは教育者として、自由自治の法律論を教え、末弟が、地方自治を省みないで薩長中

(9) 明治大学広報部編『自由への楽譜——明治大学を創った三人——』1995（平成7）年5月学校法人明治大学発行中、渡辺隆喜講演記録「矢代操の人と学問」参照。

(10) 村上一博編著『日本近代法学の巨擘・磯部四郎論文選集』2005（平成17）年11月信山社発刊。平井一雄・村上一博編著『磯部四郎研究——日本近代法学の巨擘』2007（平成19）年3月信山社発刊。

(11) (5)と同じ。

(12) 斬奸状の起草者・陸義猶が大正元年に原本を書写したものを、杉村虎一の縁で明治大学中央図書館が所蔵している。

心の中央集権国家を推進する大久保のテロ事件にかかわるわけであります」といい、さらに「近代国家における、北陸あるいは日本海地域の自立化の要請というものを、杉村三兄弟は、兄が政治運動を通じ、弟は法律論、末弟はテロ行動を通して代弁しているのであります」と総括している。見事な分析と総括である。拙論の展開上特に「近代国家における、北陸あるいは日本海地域の自立化の要請」という視座は極めて有効である。

私の立論に渡辺の表現を拝借すれば、「近代国家における日本海地域文化の自立化と波及」という主題が泛かび上がる。「自立」が意味する内実を、渡辺は自身の立場から「自治」とほぼ同義語として使用しており、私は精神文化史的視点から「孤の屹立」という意味で使っている。「孤」を抱えながら徹底した先に、「自立」し「屹立」した「個」が成立し、更にその先のところで「個」と「個」が連携する、その様態こそが典型としての日本海地域の精神伝統である、と考える。典型であるから、無論他の地域にも援用出来る。たとえば2011（平成23）年3月11日東日本を襲った大震災の際、「てんでんこ」という言葉が日本人の心に強い印象を与えたのは、記憶に新しい。「てんでんこ」の思想に貫流する同質の精神的営みが、日本海地域の精神伝統のなかに伏在しているのである。己一個の命だけ守る肉体と精神の「孤」に徹した先に、死の淵から生還した「屹立」する「個」が、同じくその過程を経て屹立する「個」たちと連携する時、困難を克服した人間たちの大きく深い共鳴と感動が生まれる。あらゆる懸命な営みに共通する「てんでんこ」の思想は、近代的自我史観をも超克するはずである。2011年3月11日の事態はその変更を迫っている。

さて、明治法律学校設立時に関わりを持った西園寺公望を除いた「明法寮の5人組」は、鳥取藩の岸本辰雄、天童藩の宮城浩蔵、鯖江藩の矢代操、富山藩の磯部四郎、金沢藩の杉村虎一、すべて日本海地域の出身者である。

4 フランスへ

岸本たちの足跡を、出身地域、共学社、貢進生、大学南校、司法省明法寮と辿って来たが、次にフランスへの留学事情に触れておく。岸本辰雄や宮城浩蔵と西園寺公望らとの交渉は、明治初年のフランス遊学時代に培われ深まって行った。1870（明治3）年2月に西園寺公望はフランスに渡り、ソルボンヌ大学に入学する⁽¹³⁾。1880（明治13）年10月まで滞在した。兆民中江篤介は西園寺から遅れて、同年11月に日本を離れている⁽¹⁴⁾。岩倉具視全権使節団に司法省出仕となって随行した。アメリカで使節団と分かれ、サンフランシスコからフランスに向かい1872（明治5）年1月にパリに入った。この後2年4ヶ月フランスに滞在。1874（明治7）年4月帰国の途についている。後に明治法律学校講師となる光妙寺三郎は1869（明治2）年11月にヨーロッパに渡り、ベルギー等を経て1874（明治7）年1月ソルボンヌ大学に入学している⁽¹⁵⁾。

(13) 明治大学史資料センター編集『明治大学小史——人物編』2011（平成23）年11月学文社発刊。

(14) 幸徳秋水「兆民先生」（『幸徳秋水全集第8巻』1969（昭和44）年12月明治文献発刊）所収。

(15) (13)に同じ。村上一博「光明寺三郎」に依る。「光妙寺」とも書く。

明法寮の5人組は司法省御雇法律顧問ボアソナードやジョルジュ・ブスケらからフランス法教育を受け、ボアソナードの推薦でフランス留学が決定する。杉村虎一と矢代操は裁可されなかった。今一人の磯部四郎は1875(明治8)年に留学していて、岸本辰雄と宮城浩蔵は1876(明治9)年の、少なくとも11月⁽¹⁶⁾にはパリに着いて、ソルボンヌ大学に入学している。西園寺公望が明治3年2月から明治13年10月、中江兆民が明治5年1月から明治7年4月、光妙寺三郎が明治7年1月から早くも明治11年3月⁽¹⁷⁾、岸本辰雄が明治9年11月から明治13年2月、宮城浩蔵が明治9年11月から明治13年6月の期間はフランスにいたことになる。明治法律学校創設に関わりを直接あるいは間接に持つこれらの人たちが、西園寺、光妙寺、岸本、宮城は1876(明治9)年11月から1878(明治11)年3月までの1年4ヶ月ほどの間は、共に行き来するか、同じ宿舍にいた。兆民だけは岸本たちが訪仏する以前に帰国していたため、パリで会うことはなかった。

この時、岸本辰雄、宮城浩蔵はフランスで中江兆民という秀逸な思想家と袖すりあうことがなかったとは言え、箕作麟祥の私塾「共学社」で相目見えている。中江兆民、岸本辰雄、宮城浩蔵がともに共学社に学んだのは、3人の中では一番遅れてここに入門した宮城浩蔵が1870(明治3)年10月からであり、3人が立場の違いはあれ大学南校にスライドするのが明治3年12月であるから、2ヶ月は同じ釜の飯を食ったことになる。どの程度の付き合いや刻苦研鑽刺激を与えあったかは分からぬ。ただ、箕作麟祥の共学社に従学したのは周布公平、井上正一、岸本辰三郎、今村和郎、中江篤介、大井憲太郎ら150人前後であった。のちに宮城浩蔵も入塾している。だから、「明治法律学校の講師たちが、この時期より仲間を形成し出すのである」⁽¹⁸⁾とあるのはそのまま諾えるのである。

5 質量のある学的空気

5-1) 箕作麟祥・中江兆民・西園寺公望らのこと

伊藤整⁽¹⁹⁾は、この時期を含めた明治期における人間と文学と思想の重層的かつ流動的イメー

(16) (5)に同じ。

(17) (13)村上一博に依ると、光妙寺三郎について「パリ大学の学籍記録によると、第一回受講登録は、一八七五年一月二六日である(略)。パリ大学に正式に入学した日本人としては黒川誠一郎(略)に次いで二番目になるが、同校を卒業し仏国法律学士の学位を取得したのは光明寺が最初である(一八七八年三月)」と村上は記している。つまり光妙寺三郎の滞仏期間はソルボンヌ大学記録文書から確実な期間を割り出すほかない。他に、村上一博の「光明寺三郎のパリ大学学籍カード」と題する論文がある。2008(平成20)年1月明治大学史資料センター編「大学史紀要12」明治大学発行所収。

(18) (5)と同じ。

(19) 伊藤整が逝去した日は1969(昭和44)年11月15日であった。恩師である平野謙は明治大学駿河台校舎5か6号館の教室で「伊藤整が死んだ」と悲痛な叫びとも思えるアナウンスをし、教壇を降りた。伊藤整の死と平野謙の肉声が、奇しくも私どもに昭和文壇史の鮮烈な一コマを脳裏に刻んでくれた。ただ、15日は土曜日であつたらしいから、17日以降の伊藤整の葬儀当日平野謙は教室で半ば叫んだ。同時に葬式に行く旨を告げて、教室を去ったのであろう。雑誌「新日本文学」(1996年3月号)に「平野謙——おもいで黄色い風呂敷——」というエッセイを私は書いたことがあり、この間の経緯を叙しておいた。ちなみに、この年平野謙先生の講義科目は「近代日本文学」であって、当時の私の手帳によれば「近代日本文学(平野謙)／わが戦後文学史」630頁／感想文10枚以内提出」と記している。「大学史の中の文化史——明治大学編」構想の備忘録としてここに書き留めておく。

ジを明治文壇史として『日本文壇史』全18巻に定着させ、上梓して逝った。1952（昭和27）年1月、雑誌「群像」に連載が開始され、1969（昭和44）年6月まで連載され、没後1973（昭和48）年1月に第18巻刊行により全巻発刊が完了している。

伊藤整は『日本文壇史1 開化期の人々』⁽²⁰⁾の「第二章」にこう書いている。

中江（兆民）は当時の洋学者の最も大きな一門であった箕作家一の秀才麟祥の門に入って学び、その推薦で大学南校の助教授になったが、こども間もなくやめた。明治二年、中江は、幕末の新進の英学者として知られた桜痴福地源一郎が本郷湯島に開いた塾に入って塾頭となり、フランス語を教えた。明治四年、彼は司法省出仕となり、フランス留学を命ぜられ、欧米視察に出かける岩倉具視の一行に、福地源一郎と共に随行し、そのままフランスにあって学び、この明治七年に帰朝したのである。彼は在仏中にルソオ以来のフランス革命思想を研究し、また社会主義思想を体得した。彼がフランスに行った時、その一年前から日本の公卿貴族の名家の子弟である西園寺公望が留学していた。西園寺は社会民主主義の学者であるエミール・アコラスについて学んでいた。中江は西園寺と親しく交わった。中江が帰った時、西園寺はまだフランスに残っていた。

さらに、伊藤整は「第二章」に継いで「第七章」に次のように書く。

十九歳の時彼（西園寺公望）は、木戸、大久保、西郷と並んで、参与であり、政府の大官であった。明治三年二十一歳の彼は政府留学生となってフランスに行った。彼がパリに着いた日は、最初の人民権であったパリ・コンミュンの結成式の翌日であった。明治十三年まで十年間滞り、ソルボンヌ大学に学んで卒業した。またルソオの弟子エミール・アコラスについて新しい社会主義思想を体得した。彼は政治青年だったクレマンソオや小説家ゴンクール兄弟と往復した。中江兆民、松田正久、光妙寺三郎の三人は、その頃同じくパリにいた友人で、同じような自由主義政治の空気をすった仲間である。中江兆民とは在仏中に同室に住んだこともあって、特に親密であった。中江は東京外語の校長をやめてから松田正久と共に自由党の代表的理論家となり、薩長閥を倒して、真の人民政府を作ることを理想としていた。滞仏中も帰朝してからも、西園寺公望は、放蕩飽くなき生活をした。しかしヨーロッパ文明と自由思想についての信念は強く、帰朝後は教育によってその理想を実現しようとし、知人の岸本辰雄、宮城浩蔵が学校創立を企てていたのに参加して、有楽町の旧島原藩邸内に明治法律学校を設立した。そこで彼はフランス流の法律の講義をした。この学校は後に明治大学になった。

岸本辰雄と宮城浩蔵がパリに入った時、兆民はすでにいなかったが、西園寺や光妙寺や兆民が醸し出していた彼らを圍繞する人間と思想の空気が、岸本や宮城をも圍繞して彼らの学問を支えるベースになったはずである。伊藤が言う「自由主義政治の空気をすった」のである。

(20) 伊藤整『日本文壇史1 開化期の人々』2002（平成14）年9月（文芸文庫）講談社発行。

5-2) 箕作麟祥・中江兆民・西園寺公望らのこと

ところで、1886（明治19）年12月に明治法律学校は南甲賀町の駿河台に移転した。その時に挙行された記念式典の様子が、『明法雑誌』（第26号明治19年12月発行）に記録されている。帝国大学総長渡辺洪基、桜痴福地源一郎、箕作麟祥、大木喬任、東久世通禧、名村泰造、福澤諭吉、中江兆民らが来賓であった。『明法雑誌』記者は、伊藤博文総理大臣、山田顕義司法大臣、西園寺公望公使らは九州地方巡回のため、残念ながら欠席した旨を叙している。箕作麟祥、大木喬任、名村泰造、山田顕義は明治法律学校の「名誉校員」である。この時期西園寺公望は教員名簿⁽²¹⁾の筆頭であった。この移転開校式典の後、引き続き立食パーティが講堂で開かれており、500名ほどの学生が接待した。記者が報告する立食パーティの模様で面白いのは、この場にいた来賓の中で唯一中江篤介即ち兆民の名前を挙げている点である。そして、「如何にして残り居られけん中江篤介先生にも此頃まで生徒の中に加はり居て色々面白き話し共なし居られたり」と記している。この記事からは、中江篤介側からの明治法律学校並びに学生たちへの愛情や親しみが感じられるし、記者が教員なのか職員なのか専属記者なのか、それとも学生なのか詳らかにしないが、いずれにせよこの記事には明治法律学校側からの、中江篤介に対する畏敬の念が揺曳している。箕作麟祥の家塾「共学社」以来、蓄積してここに至った質量ある人間と思想の歴史が、中江篤介や岸本辰雄や宮城浩蔵によって明治法律学校として結実している様相が、この記事からは読み取ることができるのである。

自由主義と民主主義とが彼らの法学を学ぶ知識の根幹になって行く。伊藤整は「フランス革命思想」「社会主義思想」「社会民主主義」「自由主義政治」という多様な語彙を使用して、コンテンツポラリーな容量や質量を有する空気もしくは雰囲気をも、ここに描いてみせたのである。繰り返せば、日本海地域の小さな藩の下級武士出身の青年たちが、貢進生から、共学社、大学南校、明法寮と辿り、今フランス・パリの自由主義と民主主義の空気を体感し骨肉として、そこに新たにフランス法学の知識を吸収して行った。

後に岸本辰雄は1898（明治31）年9月、学生に向けて「法学ノ必要」⁽²²⁾と題した演説をしている。その中で岸本は明治維新以後の我が国における法律上の沿革を4期に分けて、第1期は明治2年から13年の間として、この時期を「仏法翻譯書時代」と呼ぶことができ、明敏闊達の資質を持った司法卿・江藤新平の命で箕作麟祥先生が取り組まれた仏蘭西六法翻譯時代が、この第1期であると学生に説いている。その中で岸本は、箕作先生は法律学の専門家ではなかったが、この翻譯書の出現で当局者たちは民法や刑法の何たるかを知り、これを模範として様々な布告布達等を制定し公布することができたと箕作を評価した。

(21) 明治大学百年史編纂委員会編『明治大学百年史第1巻史料編I』1986（昭和61）年3月学校法人明治大学発行所収「帝国大学特別監督私立明治法律学校規則」に「名誉校員」と「教員」名簿が記載されている。

(22) 村上一博編著『日本近代法学の先達 岸本辰雄論文集』2008（平成20）年10月日本経済評論社発行所収。

薩長土肥連合政権下の明治国家の行く末と、岸本たち「明法寮の5人組」の人間と思想の有り様と、彼らによる明治法律学校設立とその後が、「江藤新平」評価の言辞に揺曳している点も、この岸本演説の肝心なところであるが、ここでは措く。ただ、この時期、国家はドイツ法学受容に舵をとっていたが、岸本たちはフランス法学を学んでいた。明治法律学校の行く末に大きな壁となって立ちふさがることになる民商法典論争への助走が始まっていた、とだけは言うておかねばならない。

繰り返すが、箕作麟祥の「共学社」に中江兆民と大井憲太郎とが籍をおき、明治10年代には全国を席卷する自由民権運動の、その理論と実践をになう人間に育っていく。そこに岸本辰雄がおり宮城浩蔵がおり、共に学んだ質のある学的空気が圍繞していた事態が重要なのである。延長線上に、貢進生、大学南校、明法寮があり、ボアソナードやブスケにフランス法律学を学び、ボアソナードの推薦で、自由主義と民主主義をベースにした法学をフランスで体得したのである。堆積する知の環境が、明治法律学校発足に向けて整いつつあった。

6 矢代操の思想

岸本辰雄は、明治13年2月に、宮城浩蔵は、13年6月に、西園寺公望は13年10月にそれぞれ帰国した。中江兆民は、明治7年4月にはフランスを発っていた。光妙寺三郎は11年3月に帰国している。待ち受けていたのは矢代操である。「明法寮の5人組」の1人であり、岸本や宮城は、矢代が明法寮に入った明治7年4月以来の知己であり学友であった。

矢代操は生来の病弱で、1891（明治24）年4月2日、腸チフスにより38歳の若さで亡くなっている。明治法律学校発足後10年を闊していた。明法寮時代から、岸本や宮城に学問的に遅れを取りがちだったのはそのためであった。

矢代が亡くなった直後、4月15日に岸本辰雄が行った追悼演説⁽²³⁾を、村上一博が録存している。岸本の「故矢代操君追悼演説」がそれである。概ね以下の内容であった。

明治2年貢進生となり矢代君を知り、引き続いて共に大学南校に入り、「初メテ君ト相親近シ乃チ莫逆ノ交ヲ締セリ」。そして「明治五年司法省明法寮ニ於テ二十名ノ法学生徒ヲ募集スルヤ君即チ余輩ト相携ヘテ之ニ転シ仏人ボアソナード及ヒブスケニ博士ニ就テ仏国法律学ヲ修ム」。「明治九年同窓ノ友数十人共ニ法律全科ヲ卒業シ余輩数人ハ命ヲ受ケテ仏国ニ留学シ他ノ数十名ハ各々官ニ司法省ニ就キシカ其奉仕ヲ肯セスシテ野ニ閑散ノ地ニ留マリシハ独リ君一人トス」と話して、矢代君は、「余、修養未ダ至ラス以テ自ラ足レリトスル能ハス焉ソ研精一番セサルヲ得ンヤ況ンヤ近時我邦ニ於テハ民権自由ノ論稍々行ハルヽニ至リシモ人々空疎、徒ニ流潮ヲ趁フニ過キスシテ真ニ権利ノ何タリ自由ノ何タルヲ知ル者ハ殆ト落々晨星モ啻ナラス今這般ノ智識ヲ国民ニ与ヘンニハ法律学ノ普及ヲ謀ルヨリ善キハ莫シ」と言っていたと岸本はその言説を伝えている。

(23) (22)と同じ。

ここにある「与ヘン」は決して高圧的上意下達のエドゥカシヨウ観ではない。続けて岸本は矢代操の言葉を紹介して、「教ユルハ学フノ半ナリ」というのである。「書生ヲ養ナヒ且教ヘ且学ヒ」という教育観なのである。教えることは即ち学ぶことであるという矢代操のエドゥカシヨウ観は、1890（明治23）年のいわゆる「教育勅語」の指し示す道筋と大きな懸隔がある。教育勅語への違和を持って、アンチテーゼを投げかけた西園寺公望の道筋に沿う考え方がそこに揺曳していようか。

1876（明治9）年12月和歌山藩出身の僧侶・北島道龍を中心に、大井憲太郎、矢代操等により「講法学社」が設立される。その時の「講法学社開業願書」⁽²⁴⁾が残っている。北島道龍の「教員履歴」に続いて、「駿河台東紅梅町九番地寄留 和歌山県士族 大井憲太郎」の「教員履歴」が掲げられている。中に、「慶応二丙寅年ヨリ開成所ニテ仏蘭西学修業明治元年ヨリ同三年迄筑作麟祥方ニ入塾シ同年春ヨリ同四年迄東京大学南校ニ入舎シテ仏蘭西学修業」とある。この「講法学社開業願書」には矢代の名はないが、岸本辰雄の「故矢代操君追悼演説」に依拠すれば、設置スタート時から同社に参画していたことになる。

1876（明治9）年司法省明法寮を卒業した者たちの大半は留学するか「官」や司法省に赴いて行った。にもかかわらず、矢代一人「野」にあって、さらに修業を積む覚悟をしていたというのである。しかも「民権自由ノ論」の「真ノ権利」「真ノ自由」が何であるのかを考究し、国民とともに、教え学ぶ環境を「講法学社」設置により構築しようとしたのである。1874（明治7）年にはすでに民選議院設立建白書が出されており、中江兆民によるルソー紹介も始まっていた。講法学社の校是が「民権自由」思想を中核に据えたものであることは、例えば、『朝野新聞』明治10年7月21日に「講法学社移転広告」⁽²⁵⁾が掲げられていて、本科と予科の現在実施中の授業科目を紹介している中に、「民撰議院生起論」という科目があることから、その脈絡は明白である。

先の岸本辰雄の「故矢代操君追悼演説」に戻るなら、さらに矢代を讃えて、「日本人ニシテ日本人ニ向テ法律学ヲ教授セシハ実ニ君ヲ以テ鼻祖ト為ス是レ豈我邦法学史上ニ特筆大書サル可キ君ガ一大名誉ニ非スヤ」と。そして「既ニシテ明治十三年余及ヒ宮城二人相継テ仏国ヨリ帰朝スルヤ君直チニ来リテ余輩カー臂該学舎ニ添ヘンコトヲ求ム余輩深ク君ノ志ニ感シ乃チ余輩ノ微力ヲ致セリ然レトモ時運未タ到ラス学舎萎靡盛況ニ達シ難シ於是乎遂ニ該学舎ヲ閉チ三人相謀テ新タニ一大学校ヲ開キタリ是レ即チ我明治法律学校ニシテ時明治十四年ナリキ」と語る。

矢代操が生来の病弱故、渡仏せず、官に赴かず、一人「野」にあって自由民権思想を核とした法律学を教授するために、大井憲太郎たちと立ち上げた講法学舎に、帰朝間もない岸本辰雄と宮城浩蔵を誘った。2人はその志に共鳴して講法学社の教壇に立った。しかし時運至らず講法学社を閉じ一歩後退しながら再起を図った、その新たな展望が明治法律学校創設であったと、岸本辰雄は学生たちにむけて演説したのである。

(24) 明治大学百年史編纂委員会編『明治大学百年史第1巻史料編I』1986年（昭61）年3月学校法人明治大学発行所収。

(25) (21)と同じ。

7 明治法律学校創設と「設立ノ趣旨」

鳥取藩・天童藩・鯖江藩さらには富山藩・金沢藩という厳しい自然環境と気候風土の中に生まれ育った日本海地域出身者たちが、幕末維新期の江戸東京に結集した。岸本辰雄、宮城浩蔵、矢代操、磯部四郎、杉村虎一たちであった。おおむね下級士族出身者であった。箕作麟祥の「共学社」で、中江兆民、大井憲太郎、岸本辰雄、宮城浩蔵は出会った。貢進生になり、大学南校で矢代操が合流した。司法省明法寮にスライドして、磯部四郎、杉村虎一と知り、「明法寮の五人組」と言われるほどの絆を作る。フランスで西園寺公望、光妙寺三郎と交わる。矢代操は大井憲太郎らと、「講法学社」をつくりフランス法の教育を開始した。帰国した岸本、宮城を誘い、矢代はともに講法学社の教壇に立った。そして、名誉校員「大木喬任、山田顕義、箕作麟祥、鶴田浩、名村泰蔵、ボアソナード」を擁し、教員に「西園寺公望、岸本辰雄、宮城浩蔵、矢代操、杉村虎一、磯部四郎、光妙寺三郎」を擁することになる明治法律学校が、1881（明治14）年1月に創設されたのである。

「明治法律学校設立ノ趣旨」⁽²⁶⁾ 冒頭は、

其レ法律ノ管スル所ハ其区域広漠ニシテ其目枚挙ニ遑マアラス蓋シ之ヲ大ニシテハ社会ノ構成ナリ政府ノ組織ナリ之ヲ小ニシテハ人々各自ノ権利自由ナリ凡ソ邦国荣誉人類ノ命脈皆此学ニ係ラサルナシ嗚呼人文ノ開明国運ノ進歩ヲ図ル者此ヲ舎テ其焉クニカ求メシヤ

とある。「目」が「区域」と対になるとすれば、1字は少し違和がない訳ではないが、「請問其目」（論語）というような使い方がない訳ではないし、グループとか題目とか分野という意味もある。素直に読むなら「目的」が適当で「的」の脱落かと思われる。「法律が扱う領域は広く、法律の目的もあまりにも多い」くらいに解しておく。浅学故の無知かもしれぬ。お教を乞いたい。

法律の扱う領域は広く、法律の目的もあまりにも多い。大きくは人間の集団の営みや組織的営みの総称が社会だとすれば、それを形作る縦横に張り巡らされた構成要素を法律は扱うし、また立法、司法、行政3権による統治の機構が「政府」であるとすれば、そこに張り巡らされている組織全般を、法律は扱う。さらにミクロ的には人間一人一人が有している天賦的な権利（人権）や自由をも、法律は扱うのである。国家や人間の生命活動はひとえにこの法律の学に関わっている。桜痴福地源一郎が「society」の訳語に「社会」を当てたことや、「政府」の概念をフランス学やフランス法学から岸本たちが学んだことを総合すると、以上のような訳解は成り立ちうると考える。「明治法律学校設立ノ趣旨」の第1パラグラフである。

同文書第2パラグラフの概要は、「公衆共同シテ大ニ法理⁽²⁷⁾ヲ講究シ其真諦⁽²⁸⁾ヲ拡張セント

(26) (21)と同じ。(22)にも収録。

(27)(28) ともに仏教用語。2003（平成15）年5月26日明治大学リパティタワー23階で開催された「明治大学史資料センター開設記念」の「記念講演」を井上ひさし氏にお願いした。題目は「作家と資料」であった。その講演の中で井上ひさし氏は「権利」も「自由」も、ともに西周が訳出した言葉で、元は仏教用語であり、ネガティブな「してはならない」という戒めの言葉であったと解説し、長年使われているうちにポジティブな言語に変容していったと解説した。この講演は、明治大学史資料センター編「駿台学の樹立大学史紀要第8号」（2003年2月学校法人明治大学発行）に全文掲載されている。

ス名ケテ明治法律学校ト曰フ」というこの2つのセンテンスである。日本国民は相携えて積極的に法律の根源的原理を深く調べ、本質を究明して、その絶対的真理を日本国民全体に広めて行こう。この目的を遂行するための教育機関が、名付けて明治法律学校という。この「明治法律学校設立ノ趣旨」一文には、日本海地域の精神伝統を抱えて上京し、ここまで歩んで来た若い法学者たちの質量豊かな人間関係と思想の総体が凝縮している。

8 岸本辰雄と鳥取

渡辺隆喜が提出した「近代国家における、北陸あるいは日本海地域の自立化の要請」という視座を借用して、私は「近代国家における日本海地域の精神伝統の自立化と波及」という主題を設定した。渡辺は「自立」を「自治」とほぼ同義語として使用しており、私は堆積する層としての精神伝統の視点から、「孤」を徹底した先に「屹立」した「個」が連携する様態こそ日本海地域の精神伝統である、と考える、と書いた。繰り返すが、西園寺公望を除いた「明法寮の5人組」は、鳥取藩の岸本辰雄、天童藩の宮城浩蔵、鯖江藩の矢代操、富山藩の磯部四郎、金沢藩の杉村虎一、すべて日本海地域出身者である。この章ではその所をもう少し具体的に岸本辰雄と鳥取という地理風土・精神風土を例にして書き留めておきたい。

島崎藤村に『山陰土産』⁽²⁹⁾という傑出した紀行文がある。藤村は、鳥取の特色は隠れて見えない所にあると書く。市内を流れる千代川は、1544（天文13）年から380年の間に48回も氾濫した。この惨憺たる自然と戦い続けてきたこの人たちだから身につけた、「じみな根強さ」という精神風土を藤村は見定めた。

司馬遼太郎は、1943（昭和18）年の鳥取大震災が、それまでのこの土地の人々のあらゆる営みを灰燼に帰した、その地を歩きながら、だからこの城下町の秩序は「心で感ずるしか仕方のない」ものであると、『街道をゆく27』⁽³⁰⁾に記している。直後にいかにも司馬遼太郎らしい叙述を挟んでいる。市内の交差点で出会った30代の婦人を、その挙措動作から知的で規律があり折り目がある鳥取人の典型として活写しているのである。氾濫と地震、豪雪や風雨。そうした惨憺たる自然との格闘から、知的で規律があり折り目がある精神が育まれて来た様相を、司馬は見ている。藤村と司馬とが見定めたところを総合すれば、「知的で規律がある、じみな根強い」精神が伝統と化して今あるということになる。そして島崎藤村も司馬遼太郎もともに、「鳥取」というトポスは、心眼で読み解くほかないと断じたのである。惨憺たる自然との格闘は、あくまでも冷静でなくてはならない「孤独」な戦いである。孤独な独居老人の営々とした「孤」に徹した雪下ろしを想像すればよい。いい加減な連帯より「孤」に徹した先に成立する「個」が、同じ軌跡をたどった「個」に遭遇した時、苦難を克服した人間のあらゆる創造的感動が生まれる。「孤」という言

(29) 島崎藤村『山陰土産』（『島崎藤村全集 第15巻』1950（昭和25）年12月新潮社発行）所収。

(30) 司馬遼太郎『因幡伯耆のみち、橋原街道 街道をゆく27』2006（平成18）年6月（朝日文庫）朝日新聞出版発行。

葉は使っていないけれども、藤村も司馬も見据えていたのは心眼でしか見えぬ「孤独な魂と肉体」に他ならない。その歴史が堆積して鳥取を含む日本海地域の精神伝統となる。「自立化」とは「孤」が「個」に昇華する様である。「波及」とは昇華した「個」が創造的感動を生み広げる様である。

明治法律学校初代校長・岸本辰雄は1851(嘉永4)年鳥取藩の下級武士・岸本平次郎の三男として生まれた。奇しくも父・岸本平次郎が作成した「安政五年鳥取城下絵図」⁽³¹⁾によって近年岸本辰雄生誕の地が特定された。共学社、貢進生、大学南校、明法寮、パリ留学を経て、明治14年明治法律学校設立の中心的役割を担ったのが岸本辰雄であった。法律を自由や民権のために追求し、広く国民大衆のために定着させようとした。「官」ではなく「野」の思想を重んじた。学生・平出修が上梓した『法律上の結婚』⁽³²⁾に「序」を寄せたのは、国民生活において最も重要でありながら軽視されている「婚姻法」を、「野」において根付かせようとした学徒に、岸本校長は感銘して、自分たちが追い求める法理の一端が具体化されたことに共感して、「序」を刻んだ。

司馬遼太郎が同じ『街道をゆく27』で紹介している挿話がある。かつて因幡の地に鹿野藩という小藩があって、亀井茲矩が藩主の時であった。秀吉の命令で朝鮮に出兵した際に、筑前の漁師を水先案内人として雇い、その後技量を見込んで藩に召し抱えた。その漁師が素潜り漁法の漁場として拓いたのが、今もある夏泊の漁港である。素潜り漁法は済州島から筑前に伝えられ、そして夏泊へとベルトラインのように繋がる。今もこの港で「海女」たちがこの漁法を守っている。司馬のこの挿話から、藤村や司馬がみごと捉えた鳥取というというトポスを心眼で見通す時、「知的で規律がある、じみな根強さ」が自ずと浮び上って来る。その先に「鳥取の精神風土」を越えて、惨憺たる自然との格闘を繰り返しながら、「孤」から「屹立」した「個」へ昇華した岸本辰雄に象徴される日本海地域の精神伝統や文化の堆積があり、それが明治大学に注入された、というのがささやかな私見である。

9 子母澤寛文学の基底

9-1) 子母澤寛 — 石狩国厚田村大字厚田16番地 —

岸本辰雄は30年余にわたり明治法律学校の校長として先頭にたって運営し、1912(明治45)年この世を去った。矢代操も宮城浩蔵もすでにこの世を去っている。その前年1911(明治44)年に現在の北海道石狩市厚田区厚田から南下して、東京の明治大学法科専門部に入学したのが後の作家・子母澤寛である。子母澤寛、実名は梅谷松太郎である。1892(明治25)年2月1日、北海道厚田村大字厚田16番地に生まれる。

子母澤寛は祖父を扱った作品『厚田日記』⁽³³⁾に「冬になっていた。／何処もここも雪で厚田の村

(31) (5)に同じ。

(32) 平出修『法律上の結婚』1902(明治35)年11月新声社発行。『定本 平出修集〈続〉』1969(昭和44)年6月春秋社発行所収。

(33) 子母澤寛「厚田日記」(『子母澤寛全集13巻』1974(昭和49)年1月講談社発行)所収。

はこの下に押しつぶされたようになっていた。思いもしない雪の割れ目から煙が静かに立ち昇ったりしている。南から東を廻って北へつづく山は、さらでだに朝を遅くした。たまには西の海が凧ぎて、遠い小樽方面の山々や、真っ紅な夕日が沈むのがはっきり見える日もあったが、多くは海鳴りが物を叩きつけるように聞えて雪が降った」と、また「厚田の海は冬になれば相変らず荒れる。顔を上げられない吹雪が来る」とも書いている。日本海地域の典型的気候風土がそこにあった。

唐突だが、1981（昭和46）年11月に公開された降旗康男監督、倉本聰脚本、宇崎竜童音楽、高倉健主演の映画「駅 STATION」⁽³⁴⁾（東宝）という名作をここで引き合いに出す。殺人犯を追う三上刑事（高倉）と妻・直子（いしだあゆみ）と居酒屋の女・桐子（倍賞千恵子）が、駅で別れ、駅で出会い、人生を織りなして行く姿を、駅と鉄路に象徴させ描いた作品である。三上が直子と別れるのが「銭函」駅であり、桐子と出会うのが「増毛」駅である。函館本線を札幌から小樽に向かう途上、石狩湾に面した所に「銭函」駅がある。この駅より石狩湾沿いに北上しても、今でも鉄路はない。さらに北上してゆくと、雄冬岬を過ぎ25キロ先に初めて留萌本線終着「増毛」駅が現れる。つまり「銭函」駅から「増毛」駅まで数百キロの石狩湾沿いに駅も鉄路もない、このロケーションこそ映画「駅 STATION」の主題と連結している。土地と社会と人間と人生が織り込まれているのである。北海道を知悉した倉本聰のみごとな地域設定である。蛇足だが、三上刑事が増毛にある「桐子」という居酒屋に初めて行って、桐子と語りながら酒を飲む、そこでテレビから流れるのが、紅白歌合戦で歌う八代亜紀の「舟唄」である。1979（昭和54）年12月31日。ゆく年来る年、離別と邂逅が交錯する時。作詞は阿久悠であった。

さて、「駅 STATION」で撮られた「銭函」と「増毛」の間、駅も鉄路もない所に子母澤寛・梅谷松太郎の生まれた厚田村はある。岸本辰雄や矢代操や宮城浩蔵たちが育った環境よりも、さらに厳しい気候風土の日本海地域に厚田村はある。梅谷松太郎の環境である。ただ、陰惨だけではなく、『厚田日記』は「この村は、内地人がはじめて一戸を構えて定住したのは安政三年ですが、宝永三年、語り今から百五十年も前にすでに、当時蝦夷地を領有していた松前藩が石狩、増毛と共に『三場所』に指定した程で、鱈、鮭、鱒、鱈、かになど山のように獲れ、安政六年の頃には、もう百戸になると共に、幕府の運上屋（今の税務署）が出来ました。／語りは、こんな北の果ての荒寥たる漁村とは思われない豊かなところがあって、先住していたアイヌもいい人達ばかりであった」と記している側面がしばらくはあった。しかし、子母澤寛が10歳の頃には、不漁のため「村は一日一日貧しく」なり、祖父は松太郎を連れてこの厚田の村から「夜逃げ」したのである⁽³⁵⁾。

9-(2) 子母澤寛 — 祖父・梅谷十次郎のこと —

尾崎秀樹編の「子母澤寛年譜」⁽³⁶⁾によれば、子母澤寛実名梅谷松太郎の祖父・梅谷十次郎、通

(34) DVD「駅 STATION」1981（昭和56）年東宝発売。同年公開。

(35) 子母澤寛「夜逃げした厚田村」（『子母澤寛全集 25巻』1975（昭和50）年2月講談社発行）所収。

(36) 尾崎秀樹編「子母澤寛年譜」（『子母澤寛全集 25巻』1975（昭和50）年2月講談社発行）所収。

称を齋藤鉄五郎または鉄太郎といい、1848（嘉永元）年12月2日に伊勢藤堂藩士梅谷興（興か）市⁽³⁷⁾の4男として生まれた。子母澤寛の3男梅谷第五は「江戸のど真ん中に生まれ育って、直参の侍でした」⁽³⁸⁾と語っているから、多少の出入りはあったとしても、江戸生まれ江戸育ちの「微禄な幕臣」⁽³⁹⁾であった。20歳の頃は江戸詰めをしていて上野戦争に遭遇して彰義隊に加わった。ただ周知の通り藤堂藩は鳥羽伏見の戦いで幕軍攻撃をして官軍側に寝返っており、このことを考えるならば、梅谷十次郎が彰義隊に加わった事情の裏に、何らかの幕末維新期特有の政治的判断が介在していたかもしれぬ。また、やはり梅谷第五によれば、「直参の侍でありながら、ものすごい龍の入れ墨を背中に入っていたそうです。それで喧嘩を止めに入るときなんか、片肌脱いで龍を見せたそうです」とか、「そんじょそこらの遊び人じゃなくて、本物の筋金入りの遊び人だったと思うんですよ」とかいう風貌からすれば、頑迷な愚直さを備えた下級武士の姿が立ち現れようか。そんなことが、藩は官軍、己は賊軍を貫いた事情の裏にあるのかもしれない。頑迷な愚直さを備えた梅谷十次郎像は、子母澤寛自身、祖父十次郎を描いた『蝦夷物語——或る二人の敗走者——』⁽⁴⁰⁾でも『厚田日記』でも一貫していて変わらない。

1904（明治37）年に内閣馬政局書記・山崎有信が『彰義隊戦史』⁽⁴¹⁾という書を上梓していて、その中の「彰義隊の組織」の章に上野戦争に参加した隊士700名あまりの名前を書き留めている。山崎によれば、この名簿はもともとは彰義隊会計係・関清次郎が兵糧米その他の物品を各隊に交付するために、手控えとして「彰義隊人名台帳」なるものがあって、それを謄写したものである。山崎有信はこの謄写「台帳」は戊辰4月5日までの名簿でありその後の異動は把握していないが、比較的詳細なものであるから、誤謬を山崎が訂正したものをここに掲げると記している。兵站が軍隊の活動における生命線である以上、人員把握は正確でなくてはならなかったと思われるから、名簿記載の信憑性は高いはずである。

(37) 2013年12月1日（日）に私は、子母澤寛の祖父・梅谷十次郎とその父・齋藤興市の事蹟を調べに、津市にある三重県立図書館を訪ねた。渡邊、村田両図書館員の協力を得ながら、藤堂藩士「梅谷氏」もしくは「齋藤氏」を探した。上野市総務部市史編さん室編『廳事類編人名索引』1996（平成8）年3月発行、同編さん室・久保文武編著『藤堂藩城代家老日誌 永保記事略』1994（平成6）年発行に目を通したが当該「氏」は発見できなかった。また大部の『中川藏人政挙日記』1から4冊も閲覧した。これは津城代家老・中川藏人政寛（幼名政挙）が、天保4年（1833）から慶應4年（1868）に至る多方面に渡る事柄を記した日記であり、郷土史家・七里亀之助が末裔・中川英郎の許可を得て謄写版印刷した労作である。梅谷興市も十次郎もその生涯が重なる時期の日記である。管見によれば天保9年に中川が藩主に伴い在府していた時の日記に、「齋藤二借覧植崎大八郎上書読終井上へ廻す」とある個所を見つけられたのみである。齋藤興市は江戸詰め藤堂藩士であるから、この「齋藤」の可能性がない訳ではないが、城代家老に親炙する身分であるならば、他の文献にも登場していいはずだが、当該「氏」で可能性のあるものは「梅谷」もなかった。江戸詰めのためか、あるいは最下級の武士であったか。後者の可能性が高い。なお、『中川藏人政挙日記』発刊年月は奥付がないため判然としない。三重県立図書館蔵書印には昭和58年11月30日とあるからそれ以前の近い時期であろうか。

(38) 梅谷第五「子母澤寛」（『想い出の作家たち』文藝春秋編文春文庫2011（平成23）年5月発行）所収。初出は「回想の子母澤寛」1992（平成4）年7月「オール讀物」掲載。

(39) (36)に同じ。

(40) (33)に同じ。

(41) 山崎有信『彰義隊戦史』1904（明治37）年3月隆文館発行。論者は国立国会図書館アーカイブス「近代デジタルライブラリー」中『彰義隊戦史』から引用、参看した。

ただ、隊の組織は「本部」,「第一番隊~十八番隊」を編成して、その中をさらに第一,二,三青隊,第一,二,三黄隊,第一,二赤隊(三は未確認),第一,二白隊(三は未確認),第一,二,三黒隊と編成され、「予備隊」や「遊軍隊」が組織されていて、組織構成は極めて分かりづらい⁽⁴²⁾。その上こうした本隊組織に付属するかたちで、「遊撃隊」「歩兵隊」「砲兵隊」「純忠隊」「臥竜隊」「旭隊」「萬字隊」「松石隊」「神木隊」「浩気隊」「高勝隊」「水心隊」が付属していたようである。山崎有信が書いているように「益々士気を鼓舞す。是に於てか彰義隊の名遠近に聞え、加盟者愈々加わり、その数千に至りしと云ふ」状況からすれば、組織編成が近代的軍隊組織の合理性を備えた大村益次郎率いる官軍に比すべくもなかったのは言うまでもないし、陸続と駆けつける加盟希望者を組織編成するには逐次付属させて行く方法しかなかったかもしれない。

第何番隊か『彰義隊戦史』の記述からは判然としないが、組頭・多田金次郎配下「第一黒隊」のなかに「齋藤鉄馬」の名前が記されていた。私が調べた限りでは、齋藤鉄太郎、齋藤鉄五郎、齋藤鉄蔵、齋藤鉄馬と名乗りを変えながら、北へ北へと逃れて行った幕軍の敗残兵であり逃亡者であった実名・梅谷十次郎が、上野の山では「齋藤鉄馬」であった可能性は高い、と私は考える。

たしかに子母澤寛の祖父・梅谷十次郎は上野の山で彰義隊に加わり、敗走した。敗走して仙台に至り、榎本武揚の艦隊に合流して函館に上陸する。そこで函館戦争を戦い降伏して会津藩邸に監禁された後、解き放たれて仲間6名とともに北上して石狩国厚田郡厚田村にたどり着くのである。仲間の氏名は、平井枝次郎(彰義隊第一赤隊)、戸谷丑之助(彰義隊第一青隊)、益山鍋次郎(彰義隊第一青隊)、宮川愛之助(御家人)、常見善次郎(御家人)、福島直次郎(御家人)、齋藤鉄太郎(御家人)であったと子母澤寛は『蝦夷物語』に書き留めて、この物語の筆を置いている。

9-(3) 子母澤寛 — 梅谷十次郎の五稜郭・函館戦争 —

齋藤鉄太郎や鉄五郎が梅谷十次郎の通称としている書は、尾崎秀樹編年譜など多くあるが、それは子母澤寛の作品記述に依拠していると思われる。また彰義隊の敗走を描いた作品「玉瘤」⁽⁴³⁾には「齋藤鉄蔵」と子母澤は書いている。これらは私見によればすべて正しい。函館から北の地理的条件の厳しい厚田に逃れて行った他の6名の名前も、不自然と言えば不自然である。「次郎」3名「太郎」が1名というのは作為すら感じる。ただ徳川幕藩体制下の武士の名前が極めて改名されやすかったことも事実である。

西郷隆盛は本名ですらないのはよく知られていよう。鹿児島にある「維新ふるさと館」の『西郷隆盛』の本名ミステリー」コーナーには西郷の「通称」を簡明に解説していて、西郷の本名は「隆永」であって明治維新後その父の名と誤記されたためこちらが流布したとあり、小吉、吉之介、善兵衛、菊池源吾、大嶋三右衛門、大嶋吉之介、西郷吉之助、そして西郷隆盛とその時々の

(42) 吉村昭『彰義隊』2005(平成17)年11月朝日新聞社発行においても、大村益次郎率いる官軍の組織を「西郷隆盛指揮の薩摩藩兵一番、三番各小銃隊、一番遊撃隊、兵具一番隊、一番大砲隊、白砲隊」等とかなり詳細な記述をしているにも係らず、賊軍である彰義隊については、「谷中口をかためていた彰義隊の諸隊」とひとまとめに記述する外なかったものと考えられる。

(43) 子母澤寛「玉瘤」(『雨の音』2006(平成18)年6月(中公文庫)中央公論新社発行)所収。

状況によって改名しているのである。嫡男かどうか、元服後、家督相続、藩命、免罪後、誤記など理由は多様である。次男以下の男たちの養子縁組に際しての場合はもちろんである。改名の変転は決して異様なことではなく、むしろ日常的に行われたのである。他の例をあげれば枚挙に遑がない。森鷗外に『洪江抽斎』⁽⁴⁴⁾という傑出した史伝ものがある。その65章に鷗外はこう書き留めた。「抽斎は平姓で、小字を恒吉と云つた。人と成つた後の名は全善、字は道純、又子良である。そして道純を以て通称とした」と、さらに「別号には観柳書屋、柳源書屋、三亦堂、目耕書斎、今未是翁、不求甚解翁等がある。その三世劇神仙と称したことは、既に云つたとほりである」と。諱(いみな)、法名・戒名、号、字等もある。後一例だけ挙げるなら、新選組副長助勤・斎藤一が、山口二郎、一瀬伝八、藤田五郎と名のりを変えたことは周知の事実である。梅谷十次郎はこの斎藤一の名のり変更事情に近い。多様な変名に関する歴史的事実はこのくらいにしておこう。

斎藤鉄太郎も、鉄五郎も、鉄馬も、鉄蔵もすべて梅谷十次郎の変名だと考えられる。ましてや上野戦争で彰義隊の一員として戦い、敗れ、北をめざして逃避行を続け、榎本艦隊に合流しさらに函館五稜郭で新選組土方歳三らと官軍を迎え撃ち、土方死後降伏して会津藩邸に幽閉され、そこで赦免されてさらに北の札幌を経て、今ですら駅も鉄路もない銭函と増毛の間にある厚田村へと逃れて行った敗残兵であれば、名を隠し素性を隠し逃避行を続けたのは極めて自然であった。そうした敗残の武士・梅谷十次郎が北へ向かった確実な足跡が五稜郭函館戦争記録文書に記載されていないか。

管見によれば、近江幸男が編んだ『激闘函館新選組函館戦争史跡紀行』⁽⁴⁵⁾に収録されている「函館戦争降伏・戦死者名簿亀谷熊次郎旧蔵」という文書に「斎藤鉄弥」という名前が記録されている。これが斎藤鉄太郎、鉄五郎、鉄蔵あるいは鉄馬と名乗って来て、いま梅谷十次郎は「函館戦争」時に己の関歴を隠した変名、「斎藤鉄弥」を名乗っていたとほぼ断定してよからう。

「函館戦争降伏・戦死者名簿亀谷熊次郎旧蔵」という文書は、第1ページに真筆復刻が部分的に印刷されており、そこには「降伏則東京行之輩」と書かれて、総裁・榎本釜次郎、副総裁・松平太郎、海軍奉行・荒井郁之助、陸軍奉行・大鳥圭介らの名が記されている。第2ページ目から活字に起こしてある。榎本たちは「東京行之輩」であるが、「秋田家御預之部」の「再函館ニ至テ謹慎之輩」の項目に「伝習隊」「一聯隊」「額兵隊」に続けて、「小彰義隊」連中の名前が列挙されている中に「斎藤鉄弥」の名前があるのである。このページに至る前には「津軽家御預ヶ之部」「再函館ニ至テ謹慎之輩」の氏名が並んでいる中に、「小彰義隊」とは別項で「彰義隊」50名の名前が列記されている。この「彰義隊」の中に子母澤寛作「脇役」⁽⁴⁶⁾という短編小説に取り上げられた大塚霍之丞の名前も見える。『彰義隊戦史』によれば大塚霍之丞は上野戦争では第二白隊組頭である。この作品は歴史の闇に消えて行った「負け犬」の哀感を描いたものだ。函館戦

(44) 森鷗外『洪江抽斎』(『日本近代文学大系12巻』「森鷗外集Ⅱ」1974(昭和49)年角川書店発行)所収。初出は大正5年1月13日から同年5月17日「東京日日新聞」連載。

(45) 近江幸男編著『激闘函館新選組函館戦争史跡紀行』2010(平成22)年8月発行所収「函館戦争降伏・戦死者名簿亀谷熊次郎旧蔵」文書翻刻による。

(46) 子母澤寛「脇役」(33)収録。初出は1961(昭和36)年6月「オール読物」。

争では身分等により「彰義隊」と「小彰義隊」とに分隊化されていたものであろう。

ところで、子母澤寛は祖父・梅谷十次郎が一時幽閉された場所を函館の「会津藩邸」と『蝦夷物語』などに記しているが、この「亀谷熊次郎」文書によれば「秋田家御預」ということになる。函館で降伏した幕府軍兵士たちは、この文書によれば、「降伏則東京行之輩」と「津軽家御預ヶ之部」と「秋田家御預之部」に大別されている。降伏組をこの3つに分けた上で、「降伏則東京行之輩」は別として、子母澤寛が記録しているように、称名寺とか実行寺とか浄玄寺とか、あるいは梅谷十次郎のように会津屋敷に振り分けられたと考えるのが自然であろう。

9-(4) 子母澤寛 — 祖父・実父母・異父弟三岸好太郎のこと —

子母澤寛実名梅谷松太郎は、実父母の愛に縁の薄い子であった。子母澤寛に『曲りかど人生』⁽⁴⁷⁾という自伝的作品がある。祖父と厚田で過ごした少年の日々を起点に、明治大学を経て1918(大正7)年に読売新聞記者となった青年期に至るまでの惨憺たる生活を、水彩画の如く淡淡しく描いていて、子母澤寛の文体や筆致が躍如とした作品である。ポジフィルムをネガフィルムに転じる子母澤寛文学における技法がここにある。あるいはカラーをセピアに転じると言っても良いし、油絵を水彩画に転ずるといっても良い。実は、子母澤寛は新選組も彰義隊も勝海舟も高橋泥舟も清水次郎長も、そして祖父梅谷十次郎も自分梅谷松太郎も、それらの人達を「恨み」や「怨念」にやつした文体で描くことは絶えてなかった。日本海の厳しい風土の中で、しかも惨憺たる人間環境を淡い水彩画の如く描くには、そこに梅谷松太郎の「孤」に耐え抜いた先に確立したにちがいない、「屹立」する「個」が基底に厳として存する、そのような精神の営みがなくてはかなうまい。「恨み」や「怨念」ではない、そこを突き抜けた先にある歴史への労りや愛惜や慈しみの念があって子母澤寛文学は成立しているのである。衆生を許す聖者の風格すら漂っている。近代的自我や近代的エゴの範疇では決して捉えきれぬ、「てんでんこ」の思想を抱え込んだ人間だけが、聖者の風格を醸すことが出来る。

寛は書く。札幌には「わたしの産みの母がいるのである。祖父が眼の敵にしたわたしの実父はとっくに死んで間もなく再婚し、すでに二人の子もあって、まあまあという生活をしている」とか、「わたしの生母にして見れば、現在の亭主への思惑もある。それよりも、今の亭主をイヌ畜生呼ばわりして、母の二度目の結婚を許さず、ついに村を追っ払うまでの仕打ちをした恨みもある。祖父だって、それは百も承知だ」という描写の背後に、松太郎少年の惨憺たる生活と陰惨たる血族関係が仄見えよう。

尾崎秀樹編年譜を借用すれば、梅谷松太郎筆名子母澤寛は、1892(明治25)年2月1日に父伊平、母石の間に北海道厚田郡厚田村に生まれた。実父母との縁は薄く生後間もなく、その時網元であった祖父十次郎と祖母スナに引き取られて養育された。母石は厚田村を離れ、札幌で橋巖松と一緒に2人の子を儲けている。1男1女である。尾崎年譜である。また、札幌にある北

(47) 子母澤寛「曲りかど人生」(『子母澤寛全集 24 巻』1974(昭和49)年7月講談社発行)所収。

海道立三岸好太郎美術館年譜によれば、子母澤寛の異父弟が画家の三岸好太郎であり、1903（明治36）年4月18日北海道札幌区（現札幌市）南7条4丁目に生まれるが、好太郎の本籍地は厚田郡厚田村大字厚田16番地となっている。橘巖松と石の結婚を十次郎が許さなかったため、三岸家の戸主である石の名字はそのままとし、本籍地も移していなかったことが分かるのである。先の『曲りかど人生』1文の淡淡しい文体で綴られた内実は、けっして恬淡ではない「恨み」を託つ血族環境であった。子母澤寛の実父伊平は、「祖父が目の敵にしたわたしの実父はとくに死んで間もなく（実母石は）再婚（正確には同棲）し、すでに二人の子もあって、まあまあという生活をしている」と『曲りかど人生』に書いているように、実父は母が橘と関係を持つ前後に早く亡くなっている。母石と橘の「道行き」は父伊平の死に関連があるのかどうか、今は審らかにしない。後年に至り、画家三岸好太郎は、子母澤寛と長女てるよをモデルに「兄及び彼ノ長女」⁽⁴⁸⁾を描いて、もの静かでしかも存在感あふれる肖像画を遺している。この絵が醸すモデル二人のもの静かな存在感は、三岸好太郎の異父兄梅谷松太郎に抱く感情が、穏やかでもの静かな信頼に裏打ちされていることを伺わせる。それにしても、三岸好太郎と子母澤寛の二人の芸術家を生んだ実母三岸石は、どのような人間であったのか、細かく検してみたい思いを捨てきれないのである。

9-(5) 子母澤寛 — 明治大学法科専門部 —

惨憺たる地域の気候風土と我が生活環境と陰惨たる血族環境の中で、梅谷松太郎は「孤」を深め突き抜けることで「屹立」する「個」を確立して行った。梅谷松太郎の幼年期から青少年時代にあたたかな愛情が寄り添ったとすれば、祖父母をおいて他にない。祖母はスナといった。子母澤寛はスナのことを「いつも祖父がみがみ云われて、それでいつもはいはいとにこにこしていて、やる事はきっちりやっている。祖母は昔の女で惜しむらくは文字がない、もしあの人に学問というようなものがあったら、今もきっと賢夫人として名の残った人だと思う」と随筆「お島さん」⁽⁴⁹⁾に書いている。幼少年期の梅谷松太郎が様々な困難と戦って行く上で、この祖母スナの存在は心の拠り所として大きかった。

ただ、やはり何と言っても後の作家・子母澤寛誕生と子母澤文学成立にとって祖父・梅谷十次郎は格別であった。頑迷で愚直さを備えた下級武士「斎藤鉄太郎」が寝物語に語った、上野戦争から函館戦争さらに厚田村16番地にたどり着くまでの話は、子母澤寛文学の江戸に遡行する魂を形成した。その事は子母澤寛の作品やその精神を論じる識者たちに共通する視点である。縄田

(48) 北海道立三岸好太郎美術館 HP 収蔵作品油絵作品番号 0-14 「兄及び彼ノ長女」1924（大正13）年参看。付されたコメントで岸田劉生は「三岸好太郎君の諸作もまた不思議なる美しい画境である。内から美が素純に生かされてある。愛情という様なものが形の上に美しく生きている」と述べている。

(49) 子母澤寛「お島さん」(47)の『『人』のはなし』所収。

一男⁽⁵⁰⁾、尾崎秀樹⁽⁵¹⁾、中村彰彦⁽⁵²⁾、網淵謙錠⁽⁵³⁾、今川徳三⁽⁵⁴⁾、松島榮一⁽⁵⁵⁾、高橋敏⁽⁵⁶⁾等の論にすべて共通している。例えば縄田一男が「子母澤は、祖父から徳川家に殉じて戦った人々のことを寝物語に聞かされて育ち、これが後に彼の作家活動の核ともいべき部分を形成していったのである。つまり、祖父自身が歴史の中での『脇役』であり、本書に収められた彰義隊くずれの諸作品を書くことは、子母澤寛の祖父への真摯な愛情の吐露以外の何物でもなかったのである。／

ことに『蝦夷物語』『厚田日記』の二篇は、祖父の事蹟を事実に沿って描いたものであり、前者は、祖父が上野の山で戦い敗れた後、苦勞しつつ、北へ逃げのびて函館軍に加わり、更には降伏後、士籍を奉還、蝦夷地の開拓に従事するまでが、後者では、その後の厚田での孤独できびしい生活が描かれている(子母澤寛『雨の音』中公文庫)と解説している。『脇役』は五稜郭で戦った彰義隊の「大塚霍之丞」を描いた作品で『雨の音』に収められている。

梅谷松太郎は、祖父「斎藤鉄太郎」が幕臣として義を貫いた頑迷で愚直な魂を、背負って祖父とは反対に厚田の村から江戸東京に向かう。明治大学法科専門部に1911(明治44)年入学した。繰り返すが岸本辰雄校長が突然の死を迎える1年前のことである。

「明治大学校友会名簿」⁽⁵⁷⁾(大正4年刊)によれば、「北海道石狩国厚田郡厚田村一六 梅谷松太郎」は1914(大正3)年卒業とある。明治大学在籍時代のエピソードが子母澤寛自身によって後年語られている。雑誌「駿台新報」(1933(昭和8)年10月発行)に連載企画「校友訪問記」⁽⁵⁸⁾があり、今回は子母澤寛を取り上げている。そこで子母澤は学生時代の恩師・内海月杖(弘蔵)という東京帝国大学出身の国文学者に触れて、先生は私が法律家になるために月謝を出してしてくれたが、卒業間近に私は内海先生を裏切り新聞記者になるといい、忘恩の徒となったと、その経緯を回顧している。1933(昭和8)年にこの記事を掲載した時には、まだ子母澤は内海月杖と旧に復してはいない。明治40年前後に明治大学に奉職していた教壇文学者は多士濟々であった。夏目漱石、上田敏、平田禿木、笹川臨風⁽⁵⁹⁾、佐々醒雪、登張竹風、そして内海月杖で

(50) 子母澤寛『雨の音 子母澤寛幕末維新小説集』(2006(平成18)年6月(中公文庫)中央公論新社発行)所収、縄田一男「解説」。

(51) 子母澤寛『ふところ手帖』(2006(平成18)年2月(中公文庫)中央公論新社発行)所収、尾崎秀樹「解説」。

(52) (51)所収、中村彰彦「子母澤寛の世界」。

(53) 司馬遼太郎『新選組血風録』(1996(平成8)年(中公文庫)中央公論新社発行)所収、網淵謙錠「解説」。この解説は、子母澤寛の『新選組始末記』『新選組遺聞』『新選組物語』という新選組3部作と司馬遼太郎『燃えよ剣』の地続きの様相を的確に指摘した解説である。

(54) 今川徳三「歴史・時代小説作家論 子母澤寛」(雑誌「国文学 解釈と鑑賞」1979(昭和54)年3月至文堂発行)所収。

(55) 子母澤寛『游俠奇談』(2012(平成24)年1月(ちくま文庫)筑摩書房発行)所収、松島榮一「解説」。

(56) (55)所収、高橋敏「解説」。

(57) 「明治大学校友会名簿」1915(大正4)年12月明治大学校友会本部発行。

(58) 雑誌「駿台新報」1933(昭和8)年10月発行に連載企画「校友訪問記」が掲載されており、17回目の訪問記である。ちなみに前回は『旗本退屈男』の作者・佐々木味津三であった。

(59) 吉田悦志「笹川臨風の位置」(明治大学大学史資料委員会編「大学史紀要第7号」2002(平成14)年12月明治大学発行)を参照されたい。

ある⁽⁶⁰⁾。これらの諸氏は専門部の教師ではなく予科の教師であった。梅谷松太郎が多少の曲折を経て、札幌の北海中学時代に入学し、そこで、教師として赴任して来ていた元「万朝報」記者・宮田雨亭が知人内海月杖を紹介して梅谷松太郎を知ることとなったのである⁽⁶¹⁾。師弟袂を分かった後、『曲りかど人生』の通り、梅谷松太郎は北海道にしばらく居り、1918（大正7）年読売新聞に入社し社会部記者となった。

9-(6) 子母澤寛 — 加賀藩出身・尾佐竹猛 —

先程の「駿台新報」誌上の「校友訪問記」の正式なタイトルは「新聞記者から大衆作家に転向した・子母澤寛氏」である。訪問記担当記者の記述を要約すれば、読売新聞紙上に梅谷松太郎が、平野国臣について書いた中に、鳥羽伏見の戦いと蛤御門の戦いとを取り違えて書いた。そこに立ち現れたのが法と歴史学の二筋道を歩んでいた、明治法律学校出身の俊秀・尾佐竹猛であった。「幕末明治史の大家」尾佐竹猛は、当時の新聞記者がいかに浅薄で誤謬だらけの歴史記事を書いているかに腹を立てて、雑誌「新旧時代」⁽⁶²⁾に「雨花生」のペンネームで散々攻撃していた矢先のことであった。梅谷松太郎は「憤然悟るところあつて、早速親展書を尾佐竹博士へ送つた」、「曰く」、「記事を間違えたのは新聞記者でなくして私個人です、これから大いに勉強しますから新聞記者の無智呼ばわりは取消して下さい」と訪問記記者は、子母澤寛とのインタビュー記事で紹介している。この尾佐竹猛と子母澤寛の応酬は1925（大正14）年5月のこと。

明治文化研究会編「新旧時代」に尾佐竹猛は「雨花生」ではなく、ただ「雨」という筆名を使っている。尾佐竹はこう記している。「五月八日のY新聞に『近藤勇等に生捕りになつた古高俊太郎等は京の六角の牢に繋がれたが伏見の戦の夜平野国臣などと一所に三十三名の勤王方が一束にして斬られて終つた』といふ記事があつた、平野国臣等が鳥羽伏見の戦争迄生きて居たのだとしたら之を釈放して働かせたら嚙面白かつたらう、また明治政府となつても平野等の拘禁を解か

(60) 吉田悦志「明治40年前後の明治大学教壇文学者たち — 「明治文学会」の可能性と限界 —」（明治大学史資料センター編「大学史紀要第8号」2003（平成15）年12月明治大学発行）参照されたい。なお、子母澤寛と内海月杖の関係については、子母澤寛に「雨亭先生のこと」（『ふところ手帖』）という随想あり、「明治の末頃だが、東京から北海道の中学教師にほんものの文学士がやって来るなどということは実に珍しかったと思う。雨亭先生はこの文学士で万朝報の記者をしていたが、吉原の女郎に惚れて無茶苦茶になり、私の学校へ流れて来たようだ」と書いており、「私が東京へ出て来る時に、学費が足りない、何か内職をしなくてはならなかった。それならここへ行って見ろといって、私を恩師内海月杖（弘蔵）先生へ頼んでくれた」とも書いていて、子母澤寛と内海月杖の間を取り持ったのが宮田雨亭であったことが分かる。因に岩野泡鳴が札幌に流れて来て再会するのが雨亭であったと、子母澤寛は記録している。

(61) 尾崎秀樹『子母澤寛 — 人と文学』1977（昭和52）年5月中央公論新社発行、参看。

(62) 雑誌「新旧時代」1925（大正14）年5月明治文化研究会編・発行。明治文化研究会は、1924年11月吉野作造、宮武外骨、尾佐竹猛、小野秀雄、石井研堂たちにより結成された。関東大震災による歴史的文献や文書の散逸の経験、思想としての大正デモクラシーなどの影響などを背景に、幕末維新・明治期における幅広い分野の研究活動を行った。研究活動の成果として刊行された『明治文化全集』全32巻はその金字塔である。初代会長が吉野作造、第2代が尾佐竹猛、第3代が木村毅、その下で活動したのが後の東京大学法学部所属「明治新聞雑誌文庫」に勤務した西田長寿であった。木村毅と西田長寿両氏には私は縁あって、その警咳に接する機を得た。木村氏とは西郷隆盛やラグーザお玉の伝記、西田氏とは横山源之助の全集の編集に携わることで知り合った。

ず、おまけに之を斬つたものは官軍らしいから、随分不都合な話だ、これでは余も記者と共に『血涙を禁ぜ』ないが、同時に新聞記者の知識の深いにも涙が出る。(略)」と辛辣を極めた筆鋒でY新聞記者である梅谷松太郎と新聞記者を攻撃した。これに対して梅谷松太郎が弁駁した様子は訪問記者が書いた通りである。

田熊渭津子編『尾佐竹猛』⁽⁶³⁾、明治大学史資料センター編『尾佐竹猛研究』⁽⁶⁴⁾を援用すれば尾佐竹猛の閥歴は概ね次のようになる。尾佐竹猛は、1890(明治13)年加賀藩の儒家の家に生まれた。拙論の構想からは、「尾佐竹猛」を日本海地域文化の体現者として章を起すべきだが、ここで触れることで今回は断念する。1896(明治29)年明治法律学校入学、明治32年卒業。同年19歳の最年少で判検事登用試験第1回試験に合格して、後に東京控訴院判事、大審院判事などを歴任した。尾佐竹猛が梅谷松太郎を攻撃した時、尾佐竹は明治文化研究会のメンバーであり、大審院判事でもあった。法学と歴史学の二筋道を歩んだ俊秀と言った所以である。

辛辣を極めた尾佐竹猛の梅谷松太郎読売新聞記者攻撃が、実は梅谷松太郎をして「憤然」と「悟」らしめることとなったのである。それは北海道石狩国厚田村大字厚田16番地という日本海沿い北限に近い地に、江戸上野から、仙台、函館を経て敗走していき、(斎藤鉄馬、斎藤鉄弥、斎藤鉄太郎、斎藤鉄五郎、斎藤鉄蔵と名を変えて逃亡を続けた)祖父・梅谷十次郎の無念を、言い換えるなら「江戸へ遡行する魂」を背負って、今度は祖父とは反対に南に向かった梅谷松太郎というレーゾンデートルに思い至った。それが「憤然と悟るところ」の内実なのであった。それが作家・子母澤寛誕生へ向かうエポックメイキングな出来事なのでもあった。

9-(7) 子母澤寛 — 『新選組』物語3部作 —

尾佐竹猛のきびしい批判に「憤然と悟るところ」があった梅谷松太郎は、1928(昭和3)年『新選組始末記』⁽⁶⁵⁾、昭和4年『新選組遺聞』⁽⁶⁶⁾、昭和6年度には『新選組物語』⁽⁶⁷⁾を梓に上して新選組3部作を世に問うた。梅谷松太郎は、初めて子母澤寛を名乗る。

薩長藩閥政権としての明治新政府が、新しい時代に逆らって我が志士たちの思想と行動を圧殺してきた新選組を、近代史の暗部に貶める方向に設定して、その歴史観を汎用していったのは、無論のことであった。権力の交替が宿命的にもたらず必然である。ただ、交替させた側にも、交

(63) 田熊渭津子編『尾佐竹猛』1983(昭和58)年7月 日外アソシエーツ刊行。

(64) 明治大学史資料センター編『尾佐竹猛研究』2007(平成19)年10月日本経済評論社発行。本書中、吉田悦志は「第6章 尾佐竹猛における『歴史と文学』の位相 — 融通無碍の一貫性 —」を執筆した。尾佐竹猛と森鷗外、子母澤寛、司馬遼太郎、小林秀雄などとの関係からその歴史文学観を論じたものである。

(65) 子母澤寛『新選組始末記』1977(昭和52)年3月(中公文庫)中央公論新社発行。

(66) 子母澤寛『新選組遺聞』1977(昭和53)年4月(中公文庫)中央公論新社発行。

(67) 子母澤寛『新選組物語』1977(昭和53)年5月(中公文庫)中央公論新社発行。なお、『新選組始末記』は1928(昭和3)年8月に万里閣書房から、翌昭和4年に同じ万里閣書房から、『新選組物語』は昭和7年1月に春陽堂から発刊されている。その後中央公論版『子母澤寛全集』でこの3作は1巻に纏められて、再編集されていて、講談社版『子母澤寛全集第1巻』所収「新選組始末記」もそれを踏襲して発刊された。書誌的な分析を論者は現時点ではしていない。

替させられた側にも、ともに言い分はあり、中でも旧套墨守の「義」を貫いた、交替させられた側に生きた人や組織や集団の怨嗟は、深く激しい。戊辰戦争をたたかった新選組や彰義隊は、組織的崩壊を経て個人として分散させられ、「怨嗟」を抱いて歴史の暗部に消えていった。子母澤寛の祖父・梅谷十次郎はその1人であった。

子母澤寛は『新選組始末記』に「男爵山川健次郎博士、永倉新八序」とした文章を引用している。要約する。新選組は芹沢鴨から近藤勇に隊長が変わり、京都守護職に付属した頃から、「隊長勇を初めとし、其の責任の重きを自覚し、紀律を厳粛にし、恒に守護職の命令により行動したる適法の警察隊なりき」。ところが維新後尊王攘夷論の「浪人」たちと「同系列の人々政権を握り、新選組の適法の行為を犯罪となし、其の私怨を報ゆるに至れり」。さらに「彼等は口に筆に、新選組を罵りて私設の暴行団体の如く云ひ做せり、爰に於て世人も亦往々之に惑はされ、小説に講談に、新選組を暴行団体の如く信ずるに至る。而して其の冤を解く者なきは予の遺憾とするところなり」と。

この『新選組始末記』は、幾多の文献や人物談話を総動員しながら新選組の実態を、ドキュメンタリータッチで浮き彫りにしていく手法を採用している。鳥羽伏見の戦いの現場ですら、伏見奉行所に陣取った新選組と幕府軍へ、「御香宮の山の上から、さんざん薩軍の大砲を浴びせられた。隊長の近藤は、傷手当をして大阪にいたので、土方歳三は、夜の六ッ半（七時）過ぎから、隊士を広庭に集め、決死の覚悟で応戦を開始した。大砲がたった一門、これをこの低地から山の方へ向ってどどん射ったが到底も手^{とて}答えがない」という文体でこの作品は貫かれている。証言と資料博搜による実態の浮き出し手法とこの淡々とした文体は、子母澤寛文体がスタート時に既に確立していたことを明かす。ポジをネガに、カラーをセピアに、油絵を水彩画に変換する「精神」と「筆遣い」が、やはりここにある。

それにしても、『新選組始末記』全編を貫流する精神と筆遣いが唯一軌道を外れて、ネガをポジに変換する精神と筆遣いを垣間見せるのが、この「男爵山川健次郎博士、永倉新八序」⁽⁶⁸⁾の引用部分なのである。子母澤寛が「新選組」への思いを紙背でも行間でもなく、紙面にしかも慎重に現している部分なのである。「怨嗟」や「怨念」や「恨み」という情念の世界へ逃れることのない、そこを突き抜けた先に祖父・梅谷十次郎を、正統に評価しながら、彼の「無念」を「暗部」から連れ出して描くことのできる精神と文体と手法。私小説的な子母澤寛の述懐でも祖父・梅谷十次郎の恨み節でもない「借用文」を採用した所に、その真相がある。この作品は、子母澤寛の新聞記者的資料収集能力が遺憾なく発揮されていて、高橋泥舟談とか永倉新八翁談とか山川健次郎談とかが随所に挿入されている。『新選組遺聞』『新選組物語』と書き次いで、薩長藩閥史観により歪められて

(68) 『新選組始末記』挿入文「男爵山川健次郎博士、永倉新八序」の初出文献は未詳である。山川健次郎監修『会津戊辰戦史』1933（昭和8）年8月会津戊辰戦史編纂会発行でも永倉新八『新選組顛末記』1927（昭和2）年新人物往来社発行でもない。ただ、『会津戊辰戦史』の「巻四 総野の戦」に、「勇が京都に於ける行動は適法の命令による」とある、この「適法」云々が、子母澤寛が引いた個所にある新選組は「適法の警察隊」とか「適法の行為」をなしたとかという表現語彙と近似している。まず山川健次郎談話と考えるとよからう。

いた新選組の思想と行動の全体を近代史の中に評価したのである。新選組評価の嚆矢であった。

この後、司馬遼太郎が『燃えよ剣』⁽⁶⁹⁾ (1964年)『新選組血風録』⁽⁷⁰⁾ (同年)を書き、浅田次郎が『壬生義士伝』⁽⁷¹⁾ (2000年)『輪違屋糸里』⁽⁷²⁾ (2004年)『一刀斎夢録』⁽⁷³⁾ (2011年)という新選組3部作を完成させていくのも、子母澤寛の仕事があつてのことであつた。司馬遼太郎は『街道をゆく15 北海道の諸道』⁽⁷⁴⁾ に収録されている「厚田村へ」と「崖と入江」の中で、三岸好太郎とその兄・子母澤寛に触れている。「私が子母沢さんに近づきを得たのは昭和三十六、七ごろで、当時、私は新選組のことを調べていた。ところが調べるほどに子母沢さんの『新選組始末記』を経ねばどうにもならないことがわかり、資料として使わせて頂くことになるかもしれないということで、おゆるしを得に行つた。／子母沢さんの『新選組始末記』は、意識的であつたかどうか、民俗学の採集方法を用いたもので、関係のある土地の古老の話、場所の地理的な寸法どり、さらには生き残りの隊士の回顧談などが、平明な態度で採録されている。古老や隊士が生き残つていたということが、決定的なことであつた。この人のこの著作が、新選組に関する原典になつてしまつていたのである」と。司馬新選組がいかにも『新選組始末記』の影響を受けたかが伺えるし、子母澤寛が『新選組始末記』で採用した取材の在り方と文章を「民俗学の採集方法」と指摘している司馬遼太郎の炯眼は、着目してよからう。

9-8) 子母澤寛 — 清水次郎長物語『駿河遊侠伝』—

半年近くが厳寒の冬期であり、過半を猛烈な吹雪に閉ざされる典型的日本海地域気候の北限の地で、敗残の幕臣であつた祖父に育てられ、陰惨たる血族環境の中で、己一人を見つめながら「孤」に徹して戦い、確立していった「個」が、南に向かい明治大学を経て作家として出立した記念碑が、新選組3部作である。そうした子母澤寛の作品の原郷が厚田村であり、祖父・梅谷十次郎であつた。司馬遼太郎は「十次郎は、石狩国厚田村の海に見える家の中で江戸を恋いつつ、その想いを、古典的な江戸弁にのせて孫(戸籍上は長男)の耳に飽きることなく注ぎ入れた。その孫が、江戸文化の最後の残映と敗亡の美を書くことになろうとは、語り手は思いもしなかつたにちがいない」と「崖と入江」に叙した。

梅谷十次郎が戦つた上野戦争では、敗れた彰義隊の屍が無惨にも所々に転がっていた。賊軍の汚名を着せられていたため、官軍を恐れてだれも弔うことが出来ずにいた。そこに「死ねば敵も味方もない、みな仏だ」という啖呵を切つて、その死体を丁重に葬つた江戸神田旅籠町の飾職問屋で、人足宿も當んでいた三河屋幸三郎が現れる話は、子母澤寛が好んで使う挿話(『蝦夷物語』)である。子母澤寛はこの三河屋幸三郎と同じ気持ちを持っている「日本人」に着目して、小説を

(69) 司馬遼太郎『燃えよ剣 上下』1972(昭和47)年5月(新潮文庫)新潮社発行。

(70) 司馬遼太郎『新選組血風録』1999(平成11)年11月(中公文庫)中央公論新社発行。

(71) 浅田次郎『壬生義士伝 上下』2002(平成14)年9月(文春文庫)文芸春秋社発行。

(72) 浅田次郎『輪違屋糸里 上下』2007(平成19)年3月(文春文庫)文芸春秋社発行。

(73) 浅田次郎『一刀斎夢録 上下』2011(平成23)年1月文芸春秋社発行。

(74) 司馬遼太郎『街道をゆく15 北海道の諸道』1981(昭和56)年7月朝日新聞社発行。

書いた。清水次郎長こと本名山本長五郎である。子母澤は小説『駿河遊侠伝』⁽⁷⁵⁾に、清水港で起った明治元年の咸臨丸事件とそれに対応した清水次郎長を描いている。

「明治元年九月二日早暁。海軍総裁榎本釜次郎に率いられ、回天丸の曳綱によって僚艦七隻と共に品川湾を出帆して、蝦夷脱出行を企てた幕艦咸臨丸は、大颶風に逢って失敗し、しかも蒸気の焚けず、帆はずたずたに破れ、帆柱も檣もへし折れて今にも海底の藻屑に成りそうな哀れな姿で清水港へ漂着した」。9月18日突如として官軍の富士山、飛竜、武蔵の3艦がそうした咸臨丸に大砲を放った。白旗が揚がったが、砲撃は続けられ、さらに柳川藩、阿波藩60名の藩兵たちは抜刀して船上に斬り込んだ。ほしいままに斬り殺した。その後、死体はあまねく海に捨てて、富士山丸は咸臨丸を曳航して清水港を出て品川に向かった。屍は、首のないものもあるし、首だけが浮かんでいるものもあるし、手首を切り落とされているものもある。

9月20日の夜、清水次郎長は大政と仙右衛門と子分たちを連れて、小舟を出して、浮遊する死体を収容して、丁重に弔った。幕軍の兵士へのこうした次郎長の対応が、次郎長は徳川方だという噂が立った。それを聞いた次郎長は「べら棒め、朝廷も徳川もあるもんか、死んで終え^{しめ}ばみんな仏様だ」と言い放ったという有名な話も『駿河遊侠伝』に子母澤寛は書いている。

世に言う咸臨丸事件の梗概である。時運さえあれば、梅谷十次郎もこの咸臨丸に居たかもしれないのである。北海道をめざして北上して行くことになる榎本艦隊に梅谷十次郎はその後合流することになる。斎藤鉄馬から斎藤鉄弥へと名を変えて。そして、「十一月から四月までは全く深い雪に埋もれ、海には毎日北海の岩をも砕くような怒濤が逆巻いて、その海鳴りは夜の眠りをさまたげる程」(『蝦夷物語』)の北限の地・厚田村で、司馬遼太郎が書いている通り、更らに名を変えた斎藤鉄太郎は孫の梅谷松太郎に「石狩国厚田村の海に見える家の中で江戸を恋いつつ、その想いを、古典的な江戸弁にのせて孫(戸籍上は長男)の耳に飽きることなく注ぎ入れた」。その語り「江戸文化の最後の残映と敗亡の美」の連環として、新選組3部作があり、いくつもの彰義隊物語があり、任侠清水次郎長物語がある。だから子母澤寛文学における任侠物語は、江戸に遡行する魂が掬い獲った「江戸文化の最後の残映」なのである。

9-9) 子母澤寛「座頭市物語」—— 映画監督・岡本喜八と北野武 ——

新選組物語も彰義隊物語も任侠物語もすべて、歴史の正史からみるならば、稗史であり秘話であり暗部に埋もれてしまう類いの物語である。歴史の闇や影に、密かに語り継がれて来た幕末のアウトロウたちこそ、子母澤寛が見据えていた祖父・梅谷十次郎の分身なのであった。同質の闇夜を歩むバガボンド的ヒーロー物語が、子母澤寛原作「座頭市物語」なのである。初出誌⁽⁷⁶⁾を

(75) 子母澤寛「駿河遊侠伝 下」(『子母澤寛全集 20巻』1974(昭和49)年6月講談社発行)所収。

(76) 「座頭市物語」初出誌は「小説と読物」と「週刊読売」2説ある。小嶋洋輔、西田一豊、高橋孝次、牧野悠の共同プロジェクトによる【史料紹介】『小説と読物』『苦楽』『小説界』—中間小説誌総目次(『千葉大学人文社会科学研究所』第26号2013(平成25)年3月発行所収)という労作によれば、「小説と読物」連載の子母澤寛「ふところ手帖」は同誌第3巻第4号(昭和23年4月発行)から第3巻12号(同年12月発行)まで、8回にわたり掲載されている。論者は千葉大学リポジトリ「フルテキストへのリンク」を拝見した。第何回の「ふところ手帖」に「座頭市物語」が載せられたのかは分からない。後日を期したい。

審らかにしないが、1961（昭和36）年9月刊行の小説・随筆集『ふところ手帖』⁽⁷⁷⁾に収録されることで、注目を集め翌年1962年には三隅研次監督、勝新太郎主演により初めて映画化された。『子母澤寛全集』の紙幅で言えばたかだか5ページ。勝新太郎によって見事に映像化されていく映画「座頭市」シリーズは、実は子母澤寛が書いたたった原稿用紙にして20枚弱の「座頭市物語」が初発の原型であったのである。勝新太郎主演により26作撮影され、岡本喜八監督「座頭市と用心棒」（1970年）、北野武監督ビートたけし主演「座頭市」（2003年）、曾利文彦監督綾瀬はるか主演「ICHI」（2008年）、阪本順治監督香取慎吾主演「座頭市 THE LAST」へと繋がり今も制作され続けている。他にテレビドラマや舞台をカウントすれば現在まで膨大な数が作られている。これらは、子母澤寛が定着させた「座頭市物語」のモチーフや人物像から乖離するどころか、むしろそのフレームの中で堆積する伝統のように、深みと厚みを加えて来た。子母澤寛が描いた「座頭市物語」は、概ね以下のものであった。

〈天保の頃、やくざの子分で座頭市という盲目のでっぶりした大男で、頭を剃っていて、柄の長い長脇差しをさして歩いていた。しかも盲目でありながら抜刀術居合いがうまい。いつ抜いたかいつ切ったか、徳利が見事にまっぶたつになっている。「え、悪い事をして生きて行く野郎に、大手をふって天下を通行されて堪るか」、役人と手を組んだ親分に、杯を返して姿を消す。〉

今読めば、確かに差別的な表現が多くある。多くありながら、子母澤寛の座頭市は、そのハンディを越えた人間の優しさや強さ、悪と権力にあらがう確固とした人間像を、民衆的視座から確立しているのである。このフレームは、後に続く者たちが今なお遵守している。

先に触れた岡本喜八監督勝新太郎、三船敏郎主演の映画「座頭市と用心棒」は1970（昭和45）年に封切られた。岡本喜八郎が実名である。1920（大正13）年に鳥取県米子市に生まれる。明治大学商科専門部を卒業している。1943（昭和18）年東宝に入社。岡本喜八監督「座頭市と用心棒」は、勝新太郎主演によって製作され続け、子母澤寛原作のフレームは厳守されながら、より深みと厚みを増していた「座頭市」シリーズの番外編とも言える。「座頭市」と黒沢明監督のバガボンド的ヒーロー「用心棒」を対決させる発想から、この作品が創られた。日本最強のアウトロー対決の娯楽性は勝新太郎と三船敏郎の存在感と迫真の演技、さらに岡本喜八監督のスピーディーな、間髪を入れぬ物語展開能力が重なり合うことで、見事なエンターテインメントが成立した。にもかかわらず、そうした娯楽性の基底部に、監督岡本喜八が1970年前後の時代性に着目していた想いが揺曳している。70年安保「闘争」という時代性への想いである。エンタテナーであり、また同時に我が経験から、戦争を中核に据えて「闘い」なるものを見つめ続け制作し続けてきた岡本喜八が、この時代の「闘争」が陰惨に向かい行く様相を憂いながら、権力に向かう痛快無比な娯楽性を持った「座頭市と用心棒」を、対峙させたと読み解けば、この映画の基底にある思想が積然とする。

(77) 子母澤寛『ふところ手帖』1961（昭和36）年9月中央公論社発行。前掲講談社版『子母澤寛全集25巻』所収。

明治大学の中の地域文化の文脈からは外れるが、補足すれば、北野武監督主演ビートたけしの「座頭市」がある。

北野武は1965（昭和40）年明治大学工学部入学。学園紛争激しくやむなく退学する。その後の世界的な芸術活動が評価されて、明治大学から2004（平成16）年特別卒業認定証と特別功労賞の贈呈を受けた。北野「座頭市」もまた、子母澤寛の「座頭市物語」を伝統として踏襲しながら、暖め続けてきた腹案を勝新太郎亡き後ようやく念願かなえて完成させたのである。「HANA-BI」が暴力と人間の弱さとそれ故に深まる愛の実相を、ラストの拳銃2発の残響を中空に置いて描いた作品であり、ベネチア映画祭でグランプリに輝いた。北野「座頭市」も「HANA-BI」と主題が通底するところがある。暴力と人間と愛のテーマは変わらぬ。岡本「座頭市」の娯楽性はこの作品にも強烈に発散している。ただその娯楽性の強烈な発散が、実は、民衆の劇としての北野「座頭市」のラスト、村人たちがタップを踊る歓喜の中に表現されているのである。それまでの盗賊に親を惨殺された姉弟の復讐物語と、北野「座頭市」の闇夜に生きるヒーロー物語と、浅野忠信演じる薄幸の武士夫婦の物語が交錯しながら、収斂していく。そのラストに民衆の勝利を祝う歓喜の踊りがいつまでも続くのである。「え、悪い事をして生きて行く野郎に、大手をふって天下を通行されて堪るか」といった子母澤寛「座頭市物語」の市の言葉は、権力やそれを笠に着た暴力に戦く民衆が、「孤」として生き延びながら、闇夜をさまよう「孤」に徹したヒーロー・市と握手した瞬間に、民衆の劇としての「座頭市物語」が確立した「個」の連帯を勝ち得るのである。「孤」に徹した「個」が輝く時、と言った所以である⁽⁷⁸⁾。

10 補遺 — 平出修と植村直己 —

実は私のささやかなプランでは、この先「岡本喜八」（鳥取県米子出身）「平出修」（新潟県新潟市）「植村直己」（兵庫県豊岡市）も別の章立てで書き継ぐ予定であったが、岡本喜八については、子母澤寛作「座頭市物語」で触れたこととして、平出修⁽⁷⁹⁾と植村直己⁽⁸⁰⁾のことだけ補遺として簡単に触れて全体の構想を肉付けしておく。

平出修は「ひらいでしゅう」と読む。1878（明治11）年新潟県中蒲原郡に生まれる。1901（明治34）年明治法律学校に入学して明治36年卒業した。新潟在住時期から与謝野寛晶子の雑誌「明星」に短歌や評論文を投稿するロマン主義青年であった。そして明治法律学校在学時に、明星派短歌を論じた『新派和歌評論』（1901（明治34）年10月鳴臯書院発行）と、近代日本にお

(78) この章の映画「座頭市」については、吉田悦志「明大発『座頭市物語』を繋ぐ — 子母澤寛・岡本喜八・北野武 —」と題して、2005（平成17）年6月発行「明治大学学園だより」第341号に掲載した評論文を基に加筆したものである。

(79) 吉田悦志『事件『大逆』の思想と文学』2009（平成21）年2月明治書院発行に「第Ⅱ部 反響する刑法七十三条 — 直面した文学者たち」と題して、平出修について第1章から第5章までで叙したので参考されたい。

(80) 吉田悦志「〈孤〉に徹する〈個〉が輝くとき — 平出修・古賀政男そして植村直己 —」2006年（平成18）年6月明治大学発行「M-style」収録文を加筆。

ける男尊女卑に係る制度や法の在り方を、法学徒の立場から痛烈に批判した『法律上の結婚』(1902(明治35)年11月新声社発行)を上梓し、学生時代に平出修は、法と文学のふた筋道をたしかな足取りで歩み始めたのである。卒業後間もなく判検事登用試験合格、司法官試補を経て、弁護士となる。修、27歳であったことはすでに触れた。因みに、学生時代の著作『法律上の結婚』に序文を寄せたのは、明治法律学校長・岸本辰雄であった。岸本校長は「予ハ予ノ希望ノ一部ガ、本書ニヨリテ充タレタルヲ喜び、乃チ之ニ序ス」と、若い学徒を讃えたのである。

1920(明治43)年5月、刑法第73条事案いわゆる大逆事件が発覚する。天皇暗殺未遂事件である。ことの性質上、逃げた弁護士がたくさんいた中で、平出、磯部四郎、吉田三市郎、鶴澤聡明ら、明治法律学校関係者は遁走することなく闘った。中でも平出修の弁論は、被告中紅一点・管野須賀子に最も感銘を与えた。1921(明治44)年1月26名の被告中24名に死刑判決、翌日恩赦により12名が無期減刑に。ほぼ一週間後に12名が処刑された。3、4名を除いて後は無罪という確信を抱きながら、その真実の発見者はしばらく緘黙を守らねばならなかった。友人石川啄木も発見者であった。平出も啄木も真実を知ったが故に「孤独」に耐えながら、真実の記録を行李の底に秘匿しながら、時期を待ったのである。今は、真実の発見者として、〈孤〉に徹する〈個〉が歴史に燦として輝いて、平出修も石川啄木も日本国民の心の中に居る。官権に対して命懸けの「てんでんこ」思想に基づく作業が結実したのは、彼ら亡き第2次大戦後のことであった。

冒険家・植村直己は1941(昭和16)年兵庫県城崎郡(現豊岡市)に生まれた。その植村が明治大学農学部に入学したのは、1960(昭和35)年のことである。ぶらりと立ち寄った明治大学体育会山岳部に入る。この山岳部で集団共同作業としての登山訓練をみっちり積むことになる。しかし植村は、集団共同作業としての登山に違和を感じながら居た。彼は、その著書『青春を山に賭けて』(2008(平成20)年文春文庫、文芸春秋社発行)の中で、現住の民を使った大名行列の如き登山が、本来の自分が求めていた登山なのか、それもあるがそうではないものもあるはずだ、と叙している。ここから、植村直己の単独行が始まったのである。それは、とどのつまりは「孤」に徹する悪路に、敢えて歩み出たことになる。そして植村直己は、1981(昭和56)年世界初の五大陸最高峰すべての登頂に成功する。「世界のウエムラ」誕生であった。「孤」に徹する「個」が、地球市民の中で輝き共鳴し、感動を鮮烈に与えて逝ったのである。昭和59年植村直己はマッキンリーにて消息絶つ。公子夫人の言葉が未だ私どもの耳を離れない。「あなた、だらしがないじゃないの、といてやりたい」「結婚したら山はやめます」と大嘘をついて野崎公子を口説いた植村直己という、〈孤絶〉を選んだ男のその死を、公子夫人は心底からの愛情表現で斯く語ったのである。その植村は、国民栄誉賞に輝いた。

まとめに

私は冒頭、「明治大学と日本海文化の関係を説く人がいる。改めて私もその関係性の指摘に賛同する」と書いて、「さらにラディカルに、日本海文化が都市東京の明治法律学校に注入され、

堆積し伝統と化して、いま、明治大学があるとすら考える」とも、また「この考えは変わらずある。むしろささやかな確信になりつつある。その経緯を論としてここに提示しておきたいと思に至った」とも書いて起筆した。

明治法律学校設置者である鳥取藩出身の岸本辰雄、天童藩出身の宮城浩蔵、鯖江藩出身の矢代操たちが、江戸期から明治期にかけて、おおむね下級の武士として北陸、山陰、越前という、いわゆる日本海地域の厳しい気候風土や生活の現実と格闘しながら、全身心を成長させていった様相を叙した。また、設置に際して3人に同心協力した富山藩出身の磯部四郎、金沢藩出身の杉村虎一に触れながら「明法寮5人組」という人的学的環境にその時期収斂していった若い法学徒たちの、日本海地域の精神伝統を基底に包摂した交わりを説いた。その際、日本海地域精神文化を、惨憺たる自然や生活との格闘を繰り返しながら、学的研鑽を経て「孤」から「個」へ昇華した岸本辰雄に象徴される日本海地域の精神文化が堆積し、伝統と化して、明治大学の校是を含めてその全容の中に確実にある、そうした私一個の思いは、渡辺隆喜という秀逸な歴史学の先達がいる、「日本海地域の風土と人間」を設置者3人の思想と絡めながら講演し、あるいは、「矢代操の人と学問」と題した講演でも、同じ視座から論じた土俵があってはじめて、確信にいたったのである。

渡辺は、「近代国家における、北陸あるいは日本海地域の自立化の要請」という視座を提起し、地方「自治」論の立場から論を進めた。その表現を借用して、私は「近代国家における日本海地域の精神伝統の自立化と波及」という視座に敷衍したいと書いた。無論、日本海地域のみならず厳しい気候風土や生活との格闘がある訳ではない。全国至る所にそれはある。ただ、そこには典型があるのである。典型であればこそ論として普遍化できる。島崎藤村や司馬遼太郎が「鳥取」というトポスを見つめながら、心眼でしか見通すことが出来ぬ、知的で規律がある、じみな根強さこそ、その先に「鳥取の精神風土」を越えて、惨憺たる自然との格闘を繰り返しながら、「孤」から「個」へ昇華した岸本辰雄に象徴される日本海地域の精神の典型があるのである。だから「孤独」な精神ではなく「孤」という身体と精神を共に包摂する語彙が、どうしても必要なのである。「個性」ではなく「個」と言っているのも同じ事由である。そして、己一個の命を守り抜き、孤独な魂と肉体を抱えた「孤」が歩む先に「屹立」する「個」が集合しながら共鳴と感動を醸し出す「てんでんこ」の思想を、典型化が出来れば、あるいは近代的自我や近代的エゴという定式の枠組みに、反措定を対置できるのではないか。今後の課題である。

岸本辰雄と宮城浩蔵は、まず箕作麟祥の「共学社」で仏蘭西学を学び、中江兆民や大井憲太郎などと共に勉学に勤しんだ。後自由民権運動の中心的思想家となった兆民、中心的活动家になった大井憲太郎との交わりが、明治法律学校設置の基礎を作っていく、その出立地点が「共学社」であった。そして、貢進生、大学南校、司法省明法寮、5人組、フランス留学、講法学会を経て、明治法律学校設立へと向かった経緯を叙した。フランス留学時代には、兆民が醸した人的学的環境が濃密に圍繞する中で、西園寺公望や光妙寺三郎らと共に、フランスにおける自由主義や民主主義の思想、フランス法学を学んだ。自由民権思想を理解し共鳴する基盤がこの時期に形成されていき、フランス留学こそ果たせなかったが、矢代操は独自の研鑽を経て、官に赴くのではなく

野にとどまって、中江兆民や大井憲太郎等の影響を受けながら、「民権自由」を思想の中核に据えた「講法学会」を設立して教育に当たった。帰国した岸本、宮城を誘い教鞭をとった。その直後に3人を中心に明治法律学校はスタートしたのである。

尾佐竹猛が金沢から上京し、卒業後、法と歴史学の二筋道を歩んだ。彼によって作家への道に「憤然」とたちむかう梅谷松太郎・子母澤寛が北限の日本海地域、石狩国厚田村大字厚田16番地から、彰義隊の敗残兵であった祖父・梅谷十次郎（変名斎藤鉄馬、斎藤鉄弥、斎藤鉄太郎、斎藤鉄五郎、斎藤鉄蔵）の江戸に遡行する魂を背負い上京して、明治大学に入る。梅谷十次郎が彰義隊として上野戦争を戦っていた時、奇しくも岸本辰雄の義兄・永見和十郎は鳥取藩「新国隊」の一員として官軍側で戦っていたことの歴史的皮肉は、これから視野に入れて考える必要がある。岸本辰雄は江戸にはいなかったが、「新国隊」メンバーであった⁽⁸¹⁾。その子母澤は、卒業後曲折を経て新選組3部作を上梓して作家となった。鳥取県米子から上京し明治大学を卒業後、映画監督になった岡本喜八は、子母澤寛が書いた「座頭市物語」を原作とする「座頭市と用心棒」を撮った。新潟の平出修は、明治44年大逆事件判決の背後に隠された「冤罪」の真相を石川啄木と共有した。戦後、兵庫县城崎郡からは植村直己が上京し卒業後自ら「孤絶」の道を選び、世界的な共鳴を得ながらマッキンリーに消えた。

日本海地域の精神文化と伝統が都市東京の明治法律学校に注入され、堆積し伝統と化して、いま、明治大学がある、という立論の状況証拠だけは提示できたかと思う。

(81) 阿部裕樹「新国隊の動向と岸本辰雄」(2008(平成20)年5月「大学史資料センター報告第29集」明治大学史料センター発行)所収による。阿部には他に「鳥取藩軍・新国隊をめぐる諸問題——創業者・岸本辰雄の周辺」がある。2013(平成25)年5月「大学史資料センター報告第35集」明治大学史料センター発行。